

175  
34  
111

古史傳

十九

118  
111

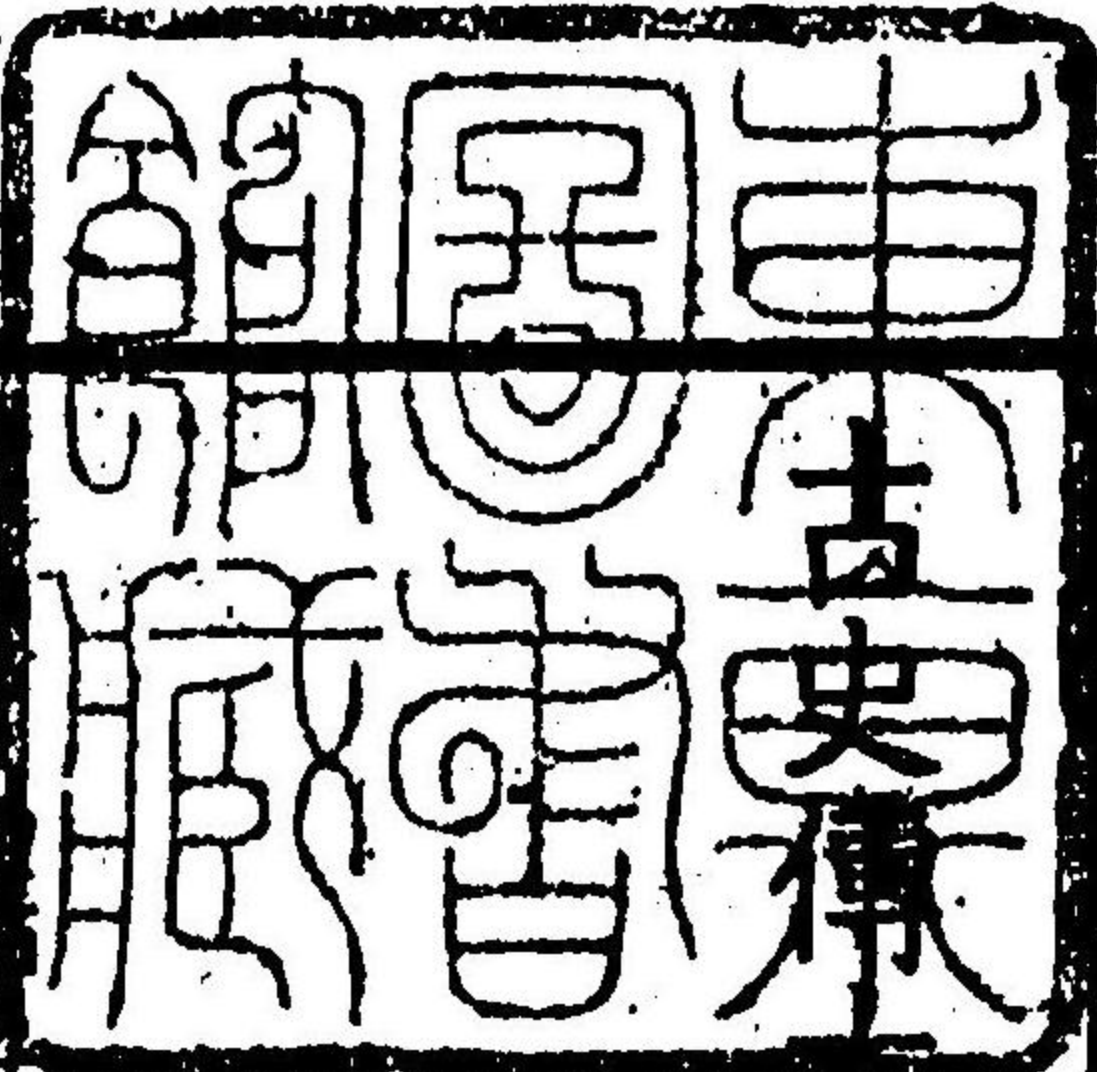
東 京 圖 書 館			
十 七 冊	二 號	二 八 函	和 書 門 類

# 古史傳

自第九十四段  
至第九十八段

## 十九

128
36
3



古史傳十九出卷

神代中十一之卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤  
孫 延胤

續攷

四十九

爾大因主神謂少毘古那神曰

吾等所造出因豈謂善成出乎

詔則少毘古那神答曰或有所

ナセトコロアルハアリトザルナサトコロキソノノチスクナヒ  
成處。或有不成處焉。其後少日

子命者。到坐伯耆國粟島。時粟

而。莠實出時。載其莖。見彈而渡。

坐常世國矣。故其地云粟島。此

二柱神坐出。所謂志都岩屋者。

アリイハミノクニニ  
在石見國也。

吾等所造之國とは。二柱神心を一び力を勦せて造給

依此大御國を詔へ也。○豈謂善成之乎とは。年まねく造

巡に給はむが。猶未成竟とめとは。謂難く。造竟ざる地を

猶多の也を。聊倦思ひ給。予依趣小聞。由依御語也。○或

有所成處。或有不成處とは。然を詔。予ども稍成せ依處も

の也。未りたて成ざる處も有。と詔へ依ふて。所成處とは。

此大御國を詔ひ。不成處を。諸外國を詔。予也。通也。

然るは少毘古那神。前ふ其外國を。獨して造。巡給ひけ

むす。御国子渡り來坐る故ふ。諸外國の成ざは事を知看  
ふ坐まは故ふ。彼國くは不成ふ比ばてを。大御國は所成  
處の也。と詔乎は意あはべし。古來の注者とち此の二柱  
神は御語は意を説得とる  
と一人どよ有とおとれし。然本書ふ。此下文ふ。是談也。蓋有  
まば其訓もまよ誤まり。  
幽深之致焉も有と。撰者此文あはぐ。大古の傳書を採て  
載はるよ。是談は。殊ふ幽深き致有げふ聞ゆは傳あはら。  
其意を思ひ得て。如此を驚らし置まらむ。信ふ幽き旨  
の御語ふぞ有は。舊き注者とちの説。此を以敬讓  
る意ある故。少毘古那神直よ言を以て諫免躬を退き  
て諫と御字記者の賛せる辞あはれど云るを漢説よ辺  
於らへる腐説あはれを更ふも言を交岡部翁ハおは好事  
此者の附會れり。神代の直き傳説よ何ぞ幽深の事は有

むと言れおまど。此を餘である語あり。直き神代の  
傳説れまど。事毎ふ幽深の致れらぬをれ物字や。○其  
後ぞを。既ふ國作竟て後ぞ云乎る如く聞ゆれどぬ。次語  
ふ。大國主神愁而詔曰。吾獨而何能得作此國。ぞ有を毛て  
見まむ。然よを非也。猶作り給ふ程の事あるを。其初は方  
は。相並て作給しを。後於方ふ至ては。と云意れ也。○粟嶋  
と。伯耆國風土記よ。相見郡郡家西北有餘戸里有粟嶋。少  
日子命時彙秀實離く。即載彙彈渡常世國。故云粟嶋也と  
見え。神代紀一傳ふも。至淡嶋而緣粟莖者則彈渡而至常  
世郷矣と也。淡を粟の借字あり。伊邪那岐伊邪那美神  
此初よ生給へる淡島よを非は思ひ混ふ  
はららびさて正書ふ。至熊野之御碕。遂適於常世郷矣と  
あるを誤あり。まよ古事記りたぬ。度于常世國也。の

み有るを  
精ウラらび  
○莠實之時ヨクと與久美能禮留時レ邇ト訓法シ但志

此ヲ師訓  
○載テ其莖ニ云々ハ莠實ヨクれる莖ニはキふ載セ也

標タ免レて其莖ノ起返カるはカみふ彈ハのキて渡リ給フ子ハ由カあ

るシ給フ処ニ掘キを飛越スむとシるガ口ニ丈一丈一丈一

み餘ト掘キあキ超ベきノ様モ無リけレ也ハ口ニ丈一丈一丈一

梢ニさラく登ル思ヒて掘キ上ニ末ニ靡キとル吳ノ竹ノ

安ヤ掘キをバ超テりト云フもノ末ニ掘キ向テ靡キ臥テ安

志ヲ彼ヲ靡ルて超エ此ヲ靡ケとシ也ハ○常世ニ固ハ師云凡テ

上代ニ常世ト云フ三ニあリ也ハ一ニは常世長鳴鳥常世思兼

神ノあトあル是ヲあリ也ハ○常夜ニ義有る也と上ニ云フ也ハグ

如シ第五十四段の二ニふは雄略天皇の大御歌ノ麻比須

流袁美那登許余爾母加母垂仁天皇卷ふ伊勢固則常世

之浪重浪歸固也顯宗天皇比室壽御詞ノ拍上賜吾常世

等万葉一ふ我國者常世爾成年ノおれらあ也此を字ニ如

く常石ニよして不變トを云也二ニふは常世固ト云ふ是

あ也右ニ三ニ其言ヲ同じシけキども其意ハ各異トして相

關ラび三ニを同意ト心得ル也字ノ同じキ迷ヒて深く

借テ常世ト考ガるノものあり言ハ此ノ同キはク字ヲ相通をシ

書ルあリ也ハ○常世固ト也如此ノ名ノけトる固ノ一ニあリ也

ふは非空ニあリ何方ニまレ也此ノ皇固ヲ遙カふ隔テ離レて也

やキ往還ガとレ死處ヲ汎ク云フ名ノあリ也故常世ハ借字トふ

て名義ハ底依固ニよテ也絶遠キ固ノ由ニあリ也ハ古ノ許ヲ登ル

許と通たし云るざとまと曾詩とを下此みふ非也四方  
上下何方より遠くゆき至りて極まる処を云こま  
と万葉乃天雲乃遠隔乃極遠雞跡養あど云依曾伎聞も  
同言あることあど委く天之常立神の処よ云るが如し  
○今云第二段の傳よ凡て上代よ常世因と云依た皆此  
注せり合せ見るべし  
意此外あし御毛沼命者跳波穗渡坐于常世因也見え  
此事神武天皇多遲麻毛理遣常世因云くと見え今云此  
卷ふ見えとり仁天皇卷よは常ふ歌ふ雁の還往處を云あぞ皆是あ  
見えと也  
已まふ後ふた人此死るを常世因ふ往と云し事ありあ  
は極死て遠き所よて便もあく往來こをも叶をぬ意よ  
て右此意とり轉しと依め此也  
固黄泉乃界丹云く書紀よ雄略天皇の遺詔ふ不謂遠疾  
至於大漸これら其意あり大漸を訓るを宇義よを當ら

後ども訓の意を崩坐て常世因ふ罷坐むと云事あ也  
て變らば死交乃ふ死てと死因を常世因と云る事あ也  
是は漢籍ぶとよ依あと多き世ふあ也て彼謂も依蓬萊  
あぞの説ふ依て此方ふ云來れる遙けき因をいふ其名  
を借き依物あ也  
彼蓬萊あど云あ依所も海路をるるふ  
小謂ゆる常世因是よ似とるう牙ふはと常石ふ不変こ  
とをを登許余と云あはち有て其名まで相叶へ依故  
みかまこれ以て附會と依ものあり然るを後世人を  
み思ひて上代の意を深く考へざる故よ不変不死を常  
世因の本義と心得居るを非あり不変不死此意よ云  
る万葉四よ吾妹兒者常世因尔住家良志昔見從変若益  
尔家利五よ等己与能久尔能阿麻越等貴可忘九よ詠水  
江浦島子哥よ常代尔至云く老目不為死不為而永世尔  
有家留物乎云くこれらあり書紀雄略卷よ此浦島子が



事を到蓬萊山とあるを、彼紀の辭として、万、漢をま  
と依るまむ、也、此、文、あ、ど、迷、ひ、て、常、世、固、を、蓬、萊、の、事  
と、思、ひ、誤、り、そ、ま、と、垂、仁、卷、小、彼、田、道、間、守、が、言、ふ、是、常  
世、固、則、神、仙、秘、區、云、く、此、語、も、後、世、此、漢、籍、の、蓬、來、此、事、あ  
ぜ、を、思、ひ、て、書、添、ら、れ、と、る、潤、色、の、文、ふ、し、て、更、よ、上、代、此  
言、よ、あ、ら、び、凡、て、書、紀、を、如、此、き、文、よ、り、て、古、の、意、を、失  
る、べ、多、う、り、知、て、右、小、云、る、如、く、常、世、固、と、は、何、處、小、ま  
ま、遠、く、海、を、渡、り、多、往、く、固、を、云、あ、ま、だ、皇、固、の、外、を、万、固  
み、あ、常、世、固、あ、也、斯、て、此、少、毘、古、那、命、は、御、祖、神、皇、產、靈、神  
此、御、手、候、と、り、漏、去、坐、お、る、神、よ、て、前、此、御、語、小、依、る、小、其  
行、方、も、知、ら、ま、給、は、さ、也、し、趣、あ、也、ち、る、は、此、葦、原、中、固、よ  
は、降、坐、び、して、外、固、小、放、往、坐、し、が、故、あ、也、久、伎、よ、を、漏、字  
漏、墮、と、あ、る、墮、も、此、意、よ、て、書、れ、と、あ、め、の、あ、り、大、名、牟、ち  
遲、神、の、事、小、自、木、候、漏、逃、而、去、と、あ、る、を、も、思、ふ、也、し

て前、小、海、と、也、依、來、坐、ゆ、を、外、固、と、也、渡、來、坐、る、小、て、此、小  
渡、坐、常、世、固、と、あ、る、は、ま、と、外、固、小、還、坐、ゆ、あ、り、ち、も、息、長  
帶、比、賣、命、の、御、歌、小、常、世、よ、坐、と、あ、れ、也、後、ま、て、外、固、小、鎮  
座、あ、也、然、れ、也、此、神、を、初、高、天、原、よ、し、て、御、祖、命、の、御、手、候  
と、り、放、去、て、降、坐、し、外、固、小、坐、神、よ、て、其、間、よ、少  
時、皇、固、よ、を、渡、來、坐、と、る、事、あ、也、し、外、固、小、坐、神、よ、て、其、間、よ、少  
今、於、ら、く、按、小、外、固、を、皆、本、此、神、の、經、營、堅、成、あ、る、万、乎、依  
物、あ、る、也、三、韓、及、漢、天、竺、そ、れ、餘、も、四、方、此、万、固、の、初、を  
内、外、依、べ、し、此、事、既、上、り、云、り、然、あ、り、て、後、よ、此、少、毘、古  
那、神、の、降、坐、て、何、の、固、を、も、み、あ、經、營、給、へ、依、あ、る、べ、し、其  
早、晚、勝、劣、あ、と、此、異、こ、そ、有、法、々、れ、悉、く、此、神、の、經、營、給、へ  
る、小、漏、と、る、固、を、有、べ、う、ら、び、其、を、人、代、此、命、此、長、さ、を、以

て計ると此の國に此の神の經營給するとは是れは時代合  
はざると思ふ人有はるまど然らば神代は漢國に謂ゆる  
と久しく長う正しう此の神代をやら萬國に此の正しき傳  
説ありき此の神の天より降りて經營給へりし事を  
此の國に御名を以てて此の國に記す社に依りて國に有  
べし其の神聖を後世まで崇祀する社に依りて國に有  
何れを聞ひても正しき事を知らず在りて抑今如  
此の國に説き傳へる人いふ思ふ心は底に著る世に  
外に説き傳へる人いふ思ふ心は底に著る世に  
はいつても信ずる皇國に物學びせむかくて後世に  
人々此事を心得居るはきも此ぞかくて後世に  
て其諸の外國を正しくの事め物も渡參來て其を  
用ふは多しと此神代に外國を正しく

渡來坐て大名年遲神を助けて諸共經營成し給す  
志趣と全符合すいぞ深き理あは事あるは故外國を  
たる事の中におも皇國の助けとれり空とれりもあり  
又害とある事も多し是れ然あるべき趣あり少  
那神を最悪而不順教養と御祖命の詔ひて初惡う  
神を坐せばもむら此の神に經營給ふ外國に元より  
き事多うはべき理あるをさまど惡きと善きを  
ひ理をもはと思ふは物ぞりし○今云ふの外國に  
經營成せる神を師説の如く信ふ此神を始あるべき  
し外國に事師説の如く信ふ此神を始あるべき  
非考須佐之男大神の荒魂五十猛神亦名を轉神の專  
掌給ふこと上第六十七段に委く注せるを合せ考べし  
まに此の少毘古那神に去坐る程に大國主神此和魂大  
主神も外國へ渡り坐り聞え其後大國主神の御子  
十五神を四方國に班遣し給ひまに其後大國主神も  
往來坐りと聞ゆ其第九十五段に其後大國主神も  
見て知べし○神は凡て其國其人の便利れり事を為さ  
あめて其を諸方の不便ある方におとしして普く人此所

用と為給ふ。○此二柱神坐之云々は。万葉三ふ。大汝小彦  
こぞあり。名乃將座志都乃石室者。幾代將經とあるは依て記せし。  
此石室は石見国ふ在こと。まは其国入小篠御野が言ふ。  
邑知郡岩屋村と云ふ。いぞ大ある岩屋あり。里人を志都  
岩屋といふ。出雲備後の堺ふ近き處ふて。濱田とめ二十  
里あるに東方あるが。最山深地あり。此岩屋の高さ三  
十五六間あり。大岩屋あり。古大汝小彦名二神は。住給へ  
依岩屋ありと。里人語り傳ふとめ。まは其近き辺も大  
あり。即此辺を濱田の主は領地。ちて古はやがて此石  
屋を祭しし。中頃とて其外別は社を立て祭る。志津

權現と申はと云ふ。此木田久老が万葉三卷考ふも。因  
人よ聞る由りて。此と同じ説を挙て。極山中辺鄙あまむ。  
万葉の哥ふりて。附會はべき所は。非此岩屋出雲備  
後此堺ふ近き所ありと云ふ。是や。稗史の志都石室あり  
らむ。風土記ふ出ると。飢郡志都。徑といふ地は。方角あり  
叶をぬもや。とく其。國人は。尋ぬべし。や云へり。さて記傳  
ふ。此哥と同卷ある。皮為酢。亦久米能若子。我伊座家流。三  
穗乃岩室者。雖見不飽。鴨とある。哥とを引て。此二首の三  
穗の岩室と志都石室を錯乱とる。哥ふて。大汝少彦名二神  
此座し。三穗石室ふて。紀伊国ありしと言れし。を久老  
其説を誤ありや。て論へること。三卷の別記も載し。此論  
を書て。本居氏に見せとる。是を己が初。此考ふて。あひ  
言ふて。あり。死や云りと有り。然れば。記傳ある説を取が  
し。はと。因入竹内。正業言ふ。邑知郡出羽庄岩屋村。深き  
岩屋ありふ。大名持少彦名神を祭て。靜權現社と稱  
すども。岩屋こそ古けき。此を志都石室と云ふ。古老ふ尋

ぬるふ後の事なり。泉は静岩室ハ安濃郡静間村の魚津  
と云處よりして。里人を千疊敷といふ。廣き石室あり。静  
村を和名抄ふ。安濃郡よ。古老也。是ぞ泉の静石室ふて。大  
名持少毘古那神の住坐は處ありて。崇むる事なり。泉  
然も有はきは。此岩室とて五町ばかり放きて。乘水と云  
處ふ。式ある静間神社ありて。祭神也。大名持少彦名命あ  
り。往昔は。此石室に傍ふ在しを。古く此邊を領とてし人  
也。勢徳あはれに任せて。乘水よ移せと云傳ふまはれ也。  
但しそを何頃と云こと知べき由あり。安濃郡は出雲國  
神門郡と相隣りて。水臣津野命の堅立給へる。其外河の化  
まりや云佐比賣山も。今を三瓶山と云てあり。其外出雲  
ふ由ある地ども多れば。神世ふに。此安濃郡ありとゆも

出雲國ありと云。はて静岩室とて四里ありて。西邇摩郡  
と所思ゆるなり。はて静岩室とて四里ありて。西邇摩郡  
温泉津村と云處に温泉ありて。此ふも二柱神を祭りて  
湯宮と稱ふ。温泉津村を和名抄ふ。邇摩郡よ温泉とある  
て今も在り。是まとはと此邊に。神々山と云ありて。高小  
因ある地名あり。峻し如巖窟の處に。其處ふも二神を祭りて。此岩窟のさま  
甚も妙ある有状にて。此も由。言ふ述がとく。  
有げふ見ゆる大岩窟あり。凡て此石見は。彼此も妙り  
見所あり。石室は多如固あり。故に名を負ふは。非に  
の。と云へり。此正業を。彼國の釋靈神社の神。然まは。何處  
を其も。定然難きよ。似あま。せぬ。安濃郡静間村の魚津あり  
は。岩室也。静間神社ふ近く。殊に地名も。所以ありて。聞ゆる

れむ。信ふ是なるべし。然れど後人よく考すて定むべしけりて志都岩室と  
も云は。二柱神相並びて。因造り巡給する布と。少時静  
は。休息坐る處お故の名。めし然も有らば。因巡お  
息ひ坐る處。諸因處くふ有はるまむ。一處定免て云む。  
非うとも思ふぞ。万葉歌此趣も。一處然る名の岩室あ  
を聞え。石見因よ。現り然る地名。此存これ。彼因ある事  
は疑あし。ハ雲御抄藻塩草あどふも名は出とまど何因  
と云さるむ。當時とくめ尋ねざりしを聞也。  
けりて文徳天皇紀。齊衡三年十二月庚午朔戊戌。常陸因上  
言鹿嶋郡大洗磯前有神新降。初郡民有煮海爲鹽者。夜半  
望海光耀。屬天明日有兩怪石。見在水次。高各尺許。體於神

造。非人間石。鹽翁私異之去。あこの兩怪石を下文お依るよ  
大奈母知少比古奈命の御像  
石。あ後一日亦有。光餘小石。在向石。左右似若侍坐。彩色非  
常。或形沙門。唯無耳目。此數の小石を二柱神よ從奉る末  
末此神とち此御像石と通えとめ  
時神馮人云。我是大奈母知。少比古奈命也。昔造此因。訖去  
往東海。今爲濟民。更亦來歸。と云する事もあ。法苑珠林  
晉建興元年。吳郡松江滬濱口。漁人遙見海中。有二人  
隨。淖入浦。漸近。乃知石像。像背銘。一曰維衛。一曰迦葉。と  
るを甚く似と。神世の傳を記留と依事。此甚古かりけ  
依事ありら。む由。之。開題記。委曲よ記し。辨。あ。依。如く。あ。る。其。古。記  
を。古。事。記。よ。撰。録。して。奏。進。れ。る。和。銅。五。年。と。此。齊。衡。三  
年。ま。で。百。四。十。五。年。あ。り。少。毘。古。那。神。の。常。世。因。お。渡。坐。る

古傳を記留むる時ふ。後世ふかくは事此有むとは誰う  
知らむ。此一事を以ても神世の傳れ正しく。宗ある事を  
辨ふべし。但しおた漢意よ甚く率られと依痴ちて此時  
人の神世此傳を疑ふ倫よいふ言ぞ。この時  
の御語ふ依れむ。少毘古那神此常世因ふ渡坐る後よ其  
御後を追て。大名持神も渡坐る也。其は此因を造竟て皇  
美麻命よ避奉給牙依後あるべき事を。言も更あ依が。其  
やぐて少毘古那神を助りて。外因を經營固免むとて  
往坐るま。是亦言も更免れ。 れ未くみ次く注いも  
て行を見て辨ふべし。 偕  
はと同紀よ。天安元年八月乙丑朔辛未。在常陸因大洗磯  
前酒列磯前神等預官社。十月己卯常陸因大洗磯前酒列

磯前兩神號藥師菩薩名神とあり。 士清云。按藥師訓。久須  
志。光明皇后佛足石。哥  
所謂。久須理師是也。推古紀。醫惠日。醫訓。久須志。孝謙紀。曰。  
德來五世孫惠日。小治田。朝廷御世被遣。大唐学得醫術。因  
号藥師。遂以為姓。此亦謂醫也。蓋因藥師名。以稱菩薩。從俗  
稱也。今也。諸因二神之所鎮座。至莫不安。藥師。呼不示甚  
哉。といへり。常陸志。ふも二神者。本朝始。教醫術。神故。洋屠  
氏。以其名。近似。附托。欺愚民。延及朝廷者矣。と見えたり。  
神名式。小鹿嶋郡。小大洗磯前藥師菩薩神社。 名神。大。那賀郡  
小酒列磯前藥師菩薩神社。 名神。大。と載さむと依即是あり。  
常陸誌。大洗磯前神社。在鹿嶋郡酒列磯前神社。今ハ寛  
文三年秋。平磯村人。發古塚。得石棺。棺内有種々器物。如甲  
冑者。如旌旗。竿者。又有太刀一口。短鉞一口。陶器。兩三箇。塚  
外。四面數百步。頃皆埋陶器。狀如牆址。老父相傳。磯前明神  
墟云。とあり。今ハ形の は 是ふ就て按ふ。神功皇后の  
如き御社ありとぞ。御歌。小常世よ坐り岩立。少御神と詠給ひ。前小舉と依

式ふ。能登、罔羽咋郡ふ。大穴持、神像石、神社。能登郡ふ。宿那彦、神像石、神社とあるも。常陸、罔ふ有し如き。神態の有けむ由、何依社、あ依るし。此、兩社のこと。清和天皇紀よ、貞觀二年六月九日、能登、罔大穴持、神宿那彦、神像石、神二前、けりて山城、北京、五條天神、社も。小彦名、並列、於官社とあり。けりて山城、北京、五條天神、社も。小彦名、命を祭まじ。鎮座の年は詳あらばと諸書ふ云。神記よ。空海法師が始、祭まる由云るハ信グとし。偕この社よて、毎年の除夜よ。木餅を供ふ依祭あり。人皆詣て其餅を取。此を勝鯨といふ。病を除く為あり。四、季物語、世諺問答、あぞ見べし。さて天皇、此御惱みのと丸。或は諸罔ふ疫流行て、騒しき時、あどふ。此社、小鞆を懸らる。そを此、神病を療る神、あ依故よ。天子の不豫、まよを疫流行る。此、人の家、小は鞆を掛けて、出入を得ざらむ。昔ハ勅勘馬山よも、鞆負、明神と云あり。是も鞆をけりて、伯耆、罔粟嶋、挂ら依、神あり。諸書よ見えたり。

ふは、右此由有まむ。決免て此神の社あるべき。式りて見え。紀伊、罔名草、郡ふ。加太、神社と何依を。諸書よ、粟嶋、神社とて。少毘古那、神ある由云。加太、地名ふて、和

入まで、加太、郷と何り。南紀名勝志よ、加太、庄、加太、村の西、南、辺、あり。社家の説よ、此、神古く、友、島の中、小島、手と云、処、在しを、参詣、此、便、あしき故、中、古、今、処、移、り、云、といへ。中、古、其、処、り、坐、於、免、と、本、を、決、め、て、伯、耆、罔、と、り、移、ち、と、り、然、ら、で、も、粟、嶋、を、云、と、し、無、あ、不、諸、け、ま、む、あり。故、本、此、粟、嶋、ふ、を、社、お、き、よ、や、有、ら、む。

罔ふ。式外ふて。此神を祭れと聞ゆ依が多う依中ふ。三代實録よ。元慶三年三月九日。下總、罔正六位上小松神、從五位下。とある神ハ。今香取郡ふ在る。神崎社あること。彼社ふ傳はる。數の古文章を見て知、と依。此ふ祭依神も。

少毘古那神あり。其をまが社の在所を。今を神崎と云ふども。正元元年此古文書。神崎大明神御領小松郷と見えて。今め社の坂本を。南方より少し放れて。小松村と云ふ村名あり。然れど正元此頃は。此邊を去げて小松郷と云ふ。さきど此郷名。和名抄よを見え。其後よ又正元二年此古文書。總領宮和田。小松。上島。多賀。青山。あといふ神領の村名見えある。今も此邊小其名此村と有。今此社あるを小山よて。謂ゆる坂東太郎といふ。大河よさし出と依崎あり。山号を双生山せい。俗名を知らで。ナニジャモンジャ此木と称ふ。名高く大なる神木あり。己見よ。藪肉桂といふ木の老木とあま。依故よ。いぢり葉形の変れ。ちて此社此祭神を。少毘古。るふて。楠木の類。此香木あり。ちて此社此祭神を。少毘古。

那神ありと云由は。承平二年と云次々。小社殿を公より造營し給。与る状を圖せる古文書。西方有大浦。俗眞世。宇良云。當浦中。當社。明神住給。白鳳二年癸酉二月一日。當山影向。六所鎮守とあり。六所と云。上よ引とる。正元二年。此を大川を隔て。西方常陸。因河内郡。小寄と依浦。ふて。其所ふいと。小き浮嶋二。於並びて。其傍よ小祠二あり。粟嶋神と云ふ。はと此嶋を舊と。り粟嶋とも。二嶋とも云ふ。神崎神。紀伊。因加太浦と云。此嶋よ乘て移。与給。与依。後。ふ今此地。与移し奉れり。と所の古老此傳あり。あを浮島。由を洪水の時も。水よ隠依。事あく。常のおとし。片葉の。葦生とまど。神此惜み給ふ。とて取人れし。此所をり時。



神崎社、予、世に謂ふ龍燈と云物の上りて、往來する者見  
 る人多く、此布神々しき事ども、何の頃と云、社家よても、彼島をむ、本此地と傳  
 様と云て、何の頃と云、社家よても、彼島をむ、本此地と傳  
 牙於くも、何の頃と云、社家よても、彼島をむ、本此地と傳  
 來たり、然るに、其神主、神崎光武、己が教子、お依故、季  
 く探り、然るに、其神主、神崎光武、己が教子、お依故、季  
 とき物、お、面、足、惶、根、神、を、祭、れ、る、社、を、古、社、お、決、め、て  
 有、ま、じ、き、由、あり、お、眞、の、古、学、よ、あ、ま、て、後、よ、自、辨、へ、知、て  
 ぼ、し、お、思、ひ、合、は、べ、き、事、あり、其、を、此、と、り、ハ、然、し、も、遠  
 う、ら、お、思、ひ、合、は、べ、き、事、あり、其、を、此、と、り、ハ、然、し、も、遠  
 村、あり、此、所、れ、る、隣、郡、海、上、郡、お、常、世、田、と、も、小、松、と、め、云  
 此、薬、師、を、舊、く、粟、島、神、を、云、し、を、何、時、と、云、予、り、此、を、若、く、は、  
 之、と、若、き、布、ど、老、人、の、物、語、あり、と、云、予、り、此、を、若、く、は、  
 最、古、く、小、松、郷、お、る、神、崎、社、此、神、を、移、し、祠、れ、る、社、あり、け  
 む、も、知、ら、れ、る、其、所、を、小、松、と、も、常、世、田、と、然、ま、む、神、崎、  
 社、お、祭、る、神、も、少、毘、古、那、神、お、坐、お、と、疑、ひ、お、し、但、し、神、  
 や、ら、む、古、と、云、管、お、納、と、い、は、ふ、て、神、主、も、知、さ、る、を、相  
 殿、の、神、躰、あり、と、云、物、を、図、せ、依、形、を、見、る、よ、舊、く、仏、者、と

め、の、龍、神、此、像、と、て、物、ま、る、ふ、似、と、め、中、頃、に、此、社、も、甚、く  
 佛、風、よ、率、ら、ま、さ、る、趣、古、文、書、よ、見、え、ぬ、れ、バ、此、は、め、と、海、  
 神、を、相、殿、お、祭、り、ら、む、故、お、二、座、と、云、傳、へ、と、る、お、ら、む、  
 凡、て、此、辺、よ、お、海、神、よ、由、ある、社、多、く、か、の、龍、燈、と、云、お、物  
 此、往、く、上、る、お、と、も、海、神、よ、由、あり、て、お、お、の、近、き、年、比  
 の、事、お、依、る、常、陸、國、水、戸、此、醫、師、何、某、と、い、ふ、人、の、子、此、社  
 よ、て、異、人、よ、出、會、ひ、薬、方、の、書、を、授、け、り、と、い、ふ、事、あり、此、を  
 別、お、委、く、記、せ、る、物、あり、此、社、此、祭、神、お、由、あ、依、事、お、ま、バ、  
 因、り、い、  
 さ、ら、い、  
 記、し、  
 出、於、

於、是、大、國、主、神、愁、而、詔、曰、吾、獨

而、何、能、得、作、此、國、孰、神、與、吾、能

ツクラマシコノクニヲトノリタマヒキコノトキニタチマニヤキ  
相作此圀耶詔出。是時忽然神

ヒカリテラレワタノハラヲシテシロキヨソホヒアラハレナミノホニテ  
光照海原。爲素裝束現。浪末而。

モチアノヌホコヲテアリヨリクルカミソノカミノリ  
持天薙帚而有依來神。其神詔

タハクヨクヲサメアガニヘラバアレトモドモニアヒツクリナシ  
曰。能治吾前則吾共與相作成

テムモシズシカラハクニガテレナリトノリタマヒキカレ  
焉。若不然則圀難成焉。詔矣。爾

オホクニヌシノカミトヒタマハクシカラバイニシハタレゾモ  
大圀主神問曰。然則汝者誰耶。

コタヘタマハクアハイニシノサキミタマクシミタマナリオホ  
答曰。吾者汝出幸魂奇魂也。大

クニヌシノカミヲラシタマハクウ、シカリスナハチシルイニシハアガ  
圀主神白曰。唯然。迺知。汝者吾

サキミタマクシミタマナリケリイマオモフスムトイツコニヅト  
幸魂奇魂也矣。今欲往何處耶

マラシタマヘバノリタマヒアレラバイツキマツレトヤニト  
白出則答言。吾者伊都伎奉倭

ノアラカキヒムカシノヤミノヘニキカレニカレコツクリ  
出青垣東山上矣。故於彼處營

御室而令鎮坐矣。故云御室山。

此者大三輪出大物主神也。大

国主神出和魂也。亦此神出荒

魂神者。坐狹井社也。

ウヒテ 愁而ハ。少毘古那神の常世国ふ渡<sub>レ</sub>給<sub>レ</sub>し故あ<sub>レ</sub>也。○獨而

之比登理志氏と訓べし。師云万葉三よ草枕客之有者獨

爲而見知師無美。あまを契冲ガヒトリ平テ。と訓 十二月。

二爲而結之紐乎。一爲而吾者解不見直相及者。古今集お

獨して物を思<sub>レ</sub>牙ば云く。此餘も何<sub>レ</sub>也。今世も常如此云

あ<sub>レ</sub>也。○何能得作<sub>レ</sub>。伊加傳加母延都久良牟。と訓べし。那

敘余久都久流許登衰延年と訓むを漢

文訓あり。委くハ記傳よ就て見るべし。○孰神與吾。あ<sub>レ</sub>

孰之神登共爾吾波と訓べし。師云耶字讀べ<sub>レ</sub>らば凡て

る言の下よ。乎耶哉あ<sub>レ</sub>どの字を置くを夜と讀こ<sub>レ</sub>常あ

れども御国語ふ<sub>レ</sub>。孰何誰あ<sub>レ</sub>ど云ぬぐひの言<sub>レ</sub>此結め

ふ夜と云あ<sub>レ</sub>とあ<sub>レ</sub>し。中昔までも此格<sub>レ</sub>違へるあ<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>無

べしを近世人<sub>レ</sub>是をえあ<sub>レ</sub>らば哥よも文<sub>レ</sub>あ<sub>レ</sub>も共よ作<sub>レ</sub>む

やと云ふ多き漢文はて古事記ふを右に如く愁  
読み耳習ひるひぐ事あり。けりて古事記ふを  
而云く少有を書紀の傳ふては。自後國中成ざる所を  
ば。大己貴神獨して巡造也。出雲國に到坐して。此國を理  
まると。唯吾一身此み。吾と共に天下を理れは神也。蓋有  
むと興言し給ふ時よ云くと有る。異なる傳あり。然れ  
た。古事記の趣ぞ然るべく覺ゆ。○神光照海云く。末小  
ぬ布徴ふ云へるをも見ゆべし。○神光照海云く。末小  
豐玉毘賣命。馭大龜而光海原云く。參來焉。垂仁天皇卷よ。  
肥長比賣。光海原。自船追來。おとも有也。皆御魂の進む時  
ふか。は神光の也。さて上よ云る書紀に傳ふ依ら。○天  
蘇矛。蘇を奴と訓て。玉の意ある由。此を天地初發此處ふ  
た。第三十六段に傳ふ云す。此を天地初發此處ふ

出と云。天津神の伊邪那岐。伊邪那美二柱神に賜へる。天  
瓊戈とは異なるが。其小擬子依物ある故よ。同じく奴保  
古を云ぬる也。彼を直よ天津神の御靈と成生出給  
て。玉よ金氣を合免依如き質ある。かくて其狀は如何と  
云よ。此と上よ既く種々の示成る也と所思れむ。之示  
衝杵おと云。其等此類ある也。玉は御靈に璽と飾付と  
る物ある也。と合せ考ふべし。○吾前を師云凡て古言  
ふ。神よ前と云ふおと多し。末小天照大御神の詔ふ。如拜  
吾前伊都伎奉。まと思金神者取持前事爲政。水垣宮段ふ。  
天皇此大御夢ふ。大物主神の詔よ。令祭我御前者。神氣不

起云。此もあらひて、何まも美麻幣と訓べし。同段ふ於御諸山拜祭意富美和之大神前と見え。龍田風神祭祝詞よ。風神此詔ふ吾前乎稱辭竟奉者云。れど見ゆ。此中ふ。あぐ事もれく。其神れ御前と心得て有ほきも有まど。又常よ云。前の意ふては。少う通え難きも何也。故思ふよ。前を座と同く。本其神の御座位を指て云言あ也。右引る文ふ前。事と何依是あり。ち多御座位を指て云。やづて其神を指て云あまむ。治吾前とは。即治我と云あむあ也。右よ引る文どもを考子て知ほし。中昔の言よも。貴人をさしては。意麻閉せ云り。今世よも御前と云。是ふおあじ。又中ごろ婦人の名よ某前某御前也云。儲まと墨江之三前大神伊豆志之八前大神あどあ

流も。三座八座と云せ同く。座とを。其神の座位を以て。其神の員を申出あ也。是ま中昔の物語文あど。貴人をむ一人二人あどを云はして。一。所二所と云るも同意あり。称徳紀詔ふも二所の天皇とあり。其を神此みふめ非也。孝徳天皇紀此詔ふ。神名王名逐自心之所歸。安付前く處くと何也。注よ前く。猶謂人く也とあまむ。人よも云しれ也。付とを。名よ付るを云。神名ま古の皇子ちの名を。安よ人々の姓名よ於くるあり。○今云。あむ神名式此首ふ見え。座前社の差別なめ。委く傳せ。○能治師云。られとるを。此ふ要とあき事れまむ洩し。此能字ハ善まと熟れむ。れ意と聞ゆれむ。與久と訓ほし。治とを。凡て物を棄措ひ。收舉て。状ふ從ひて。其がう子を宜く物ゆる字云。末ふ大因主神の詔よ。吾住所者云く而

治賜則云くとあると此を同くして宮を造營て齋祠るを。  
治せ云あ也。其由下文よ。至て知らる。はと因治養其御子之縁云く。玉  
垣宮段ふ。天皇之御子所思看者可治賜。おの二れ治む。同  
く養育を云ふ也。高津宮段ふ。因太后之強不治賜八田若  
郎女とある也。大御心の隨よ召入て寵給ふ事をも得爲  
ゑ万はぬを不治賜といふ也。續紀の詔ふ款將仕奉人者。  
其仕奉禮良牟狀隨品と讚賜上賜治將賜物曾止詔とあ  
ゆを始ふて冠位上賜治賜布。れづく多くあるは官位を  
授進とるふを治ゑるふと云ふ也。右のけりづく。事を異  
れども意を皆同じ。まよ收納理修等此字を訓も。其餘因  
衰佐牟と云言の意を皆同じ。

を治む。病を治む。亂を治む。おども皆同意也。○今云衰  
佐牟と云  
言むもと機の箴をり活用しとる言よを非ざる。まよ  
長を衰佐せ云も所を衰佐牟流より出とる言れ依べし。  
○共與ハ。師云岡部翁此登毛杼毛と訓まお依面白し。六  
帖ふ。おもづくを思ひ來おまど雁がねを同じ里子も歸  
らげにけり。後撰集ふ。背かれ松の千歳此布ぞよにめ。  
おめづくとあよ慕ハれぞせ志返し。ともづくと慕ふ涙  
此添水はいのれる色小見えて行らむ。お見也。今世おも  
常云言れ也。古言お依べし。凡ふ古言の中昔れ書りたを  
さをさ見えぬが返て今世の  
言ふ存れるが。○難成焉也。師云。那理加氏麻志と訓べし。  
多きぞかし。麻志牟と。崇神天皇紀歌ふ。多誤辭理固佐麼固辭介氏  
云よ同じ。

務介茂カモモ。手越テコよ越コむ。万葉二ふ。佐不寐者サハメ。遂爾ツヒニ有勝麻之目アリガテマシメ。  
四ふ。此月期コソキ呂毛ロモ有勝益士アリガテシ。はと妹爾戀イメガ乍宿ツク不勝家牟アヘ。ハ  
ぞのるふ依まイ。今云。此言の例カ。加氏カテは。消難行難キエガテキガテおぞ  
と同くて。難カき意イおシ。はと加泥カニと云ふも通ひて聞也。万  
三ふ。別カ不勝カ鶴ツルこの加泥カニふ。不勝カを書ると。右ミ引る加氏カテ  
ふも。同字を書るとを思ふべし。加氏カテを不勝カを書ゆ。ハ多  
閉受ヒと云意を取まるるるカ。多閉カ奴ヌを難カきと同意カ  
れむおシ。○今云。此言を不勝カとも勝カをも書るふ就て。委  
き論あり。記傳。○幸魂奇魂サキタマキタマを本ふ幸魂サキタマ此云佐サ枳キ彌ミ多タ摩マ  
ふ就て見べし。○幸魂奇魂サキタマキタマを本ふ幸魂サキタマ此云佐サ枳キ彌ミ多タ摩マ  
奇魂キタマ此云俱ク斯ス美ミ施セ摩マとシ。師云此シを共キふ和魂ニミタマの名ナふ  
て。幸奇サキタマとは其德用ハタシキを云イふ。二魂ニタマは非ヒ空カラ。幸魂サキタマを荒魂アラタマ  
和魂ニミタマをシ。其故コト。若シ二の魂ニタマあらむ。二神ニカミと現アま給タふシ  
を非ヒあり。

きふ。今現イマゑシるふ神カミを一柱イツチウおシ。はと出雲イセノ因ヰ造ツク神賀詞カミカヒノコトも。  
も。倭ヤマトの大美オホミ和ニは。此神コノカミの和魂ニミタマとシ。おシ見ミえシとシ。下  
其文コノコトを引ヒて。委イ。はと幸魂サキタマとシ。私記シキ。是左支ササキ久阿良クアラ之无ナシ  
く云イふ見ミと。留魂ルイタマ也と云て。字ナリ此コノ如シく其身コノミを守タりて。幸サキあらシる故コトの  
名ナあり。神功皇后紀カミタマノミコノミコノキ。和魂ニミタマ。服玉フクタマ身ミ而守シ。壽命シユメイとシ。は。其  
とを。奇魂キタマも字ナリ此コノ如シくよシ。奇靈キレイ德トクを以ヒて。萬事マンジを知識チカヒ辨ワ  
悟サト。種タネく此事業コノコトを成ナしむる故コトの名ナあり。万葉五マンヤクイよ。可武  
別ワカて。種タネく此事業コノコトを成ナしむる故コトの名ナあり。佐備伊麻須久サヒイマスク  
志美多麻シメタマとシ。は。石イシ字ナリ柵サシて奇キき御玉ミタマと云イふ。ハ。魂タマ  
のことコトふを非ヒ。即上ソコニよ。眞玉マキタマ成ナ二ニ。ハ。石イシを以ヒて知チ  
し。は。今大因主神イマオホニヌノカミの己命コノミコト獨ヒトしては。此因得コノニ作ツク竟ハじと憂ウレ  
給タふは。あハ荒御魂アラミタマ也ナリ。進マみて。和御魂ニミタマの乏ヒ加カしシれシ。

書紀よ、理此、因唯吾一身而已と云。故今産巢日神の御量  
て、誇り給ふ状ある傳ふても同じ。如此示し教し給  
ふて、別ふ其和魂の御形を現はえて。如此示し教し給  
ぬ。萬事を成し、産神此御聖あり。皆かく多此教の隨ふ齋祠と  
ふよ因て、和魂満足し榮坐て、其御身を守り幸へ賜ひ奇  
靈死徳を以て、遂ふ天下を作竟し給ふ。故是を幸魂奇  
魂と云ありん。此幸魂奇魂を漢籍よいはゆる魂魄  
せる説れど、皆ひがとあり。又ある問答、山崎氏  
どが、自問自答と云るれど、漢意よ溺れて、神道をえし  
らぬも、篤胤熟く、此師説を考ふゆふ、幸魂奇魂此也。  
大抵如此くあるば、まど委うらば、然るをま於此大神  
此御上れと云、其御魂の大あると、凡人の上あどくを

遙ふ勝れて御坐せむ。幾柱よめ分り給ふは、事  
云、申りも更あす。然まども、唯ふ御魂此大ある故ふ、分り  
給ふ事とのみ思はむを如何あす。もど此御魂を、其御本  
體に成生給ふ時ふ。天津神の大御魂を、殊更ふ分賜り給  
ひて、今生給ふるが故ふ。其を別て幸魂と云ひ。又そ此靈  
妙ある徳用を爲給へは、故ふ奇魂を稱ひよて、是を總  
ては和魂と申り事とぞ思ハゆ。今かく奇來給へる時  
を、知し看さば、誰ぞを問給へる程の事あるを思ひて、奇  
魂と申出、名義を悟るは、いと奇妙な事あり。御上  
や、但し此を此大神のみ、然依ふ非、都ての神、此御上  
よも、必有べき事よて、其大小優劣を、可れまど、幸魂  
と云、必天、神此賜へる物と思ふは、奇魂や云、其  
徳用の靈妙ある所、美称へて申り事と思ふべく、此



常より取總てを、只より和魂と申事と心得て、違ふこと無  
るべし。又畏々まじど、凡人の上も、小く申き事こそ異れ、其  
趣ハ同、事と思ふべし。お此事余、委き考あり、其は  
神武天皇、卷、鎮魂祭の処、お注ふを見て、知べし。○唯然

迺知汝者云く。唯を宇く、せ訓法し。宇くせは、今世人も、常

ふいふ應聲お。古書お稱唯と書て。乎く止申と讀む乎

乎は、此宇く、れ轉まるよて。諾お。万葉十六。否藻諾藻

とと、然、諾字を思ふ。師説おも、万葉お否め諾も、源

信明集、歌お、いおと、めうとも云はてと。拾玉集、歌お、おや

うやと云人、およも、れし。せ有るおやうやは、否や諾や、れ

巴。諾を即乎いと、同じ。今世も乎くと、も宇くと、も云巴

世よ、互に隔おく語らふこと、をうや、あや、然とは、案、然

ふ有る巴せ。諾ひ悟り坐る由、此御語おて。依來坐る神を。

今かく別お現を、御座せと。案は御自身、此御魂の、御軀

字分巴坐るお、故。吾者汝之幸魂、奇魂也と、お御語を。

聞看て、然、け、お。御心、慥お、應へて。案、然有る巴と

悟、坐る、れ巴。迺知と詔する御言よ、心を、然るは、古くも

今も生靈とて、人の魂、此軀を、分りて。奇異お、流靈を、成、お

せ、多加るよ、準、守て。此の有状、字も、曉り、秘、かし。昔、物、語、集

お、近江、因、ある、女、此、生、靈、此、京、よ、來、て、恨、み、思、ふ、人、を、殺、せ

る。ゆ、と、尾、張、因、ある、句、經、方、と、云、者、の、妻、此、生、靈、と、現、ま、と

て、見、聞、と、る、事、も、何、ま、と、此、よ、を、洩、し、た、但、し、そ、が、中、お、其

生、靈、此、人、お、憑、て、恨、み、惱、ま、け、其、本、人、の、自、を、然、り、と、も

知、ら、で、何、流、事、め、多、う、巴、此、段、お、己、命、此、御、靈、此、別、お、分、り

て現れ坐るおとを。知看さえて問ふ万子。趣みとく符  
子り。漢籍よも加ふる事。の多く見えぬ。中。蒙求とい  
ふ物。青女離魂とあゆ條。此。魂の分けて二人と成りて。  
異地よりゆりて物せゆを。其本人は知らず有し。其。魂の  
家より滞れる時。此。魂と合ひて一人とあれる。おとを。  
殊。由ありておと也。此。字。医書。病を為とゆ。中。お  
精。のらぬ。説。然れむ。此。和魂神の。今。現。坐。ゆ。おと。は。早く。御  
軀を分りて。異国より渡り坐して。其。国。を。造。巡。り。おと。其。国。  
趣。ふ。隨。ひ。て。種。々の。功。業。を。成。し。居。給。ひ。け。む。ぐ。本。體。の。今  
おも。少。毘。古。那。神。は。避。給。子。ゆ。おと。を。愁。ふる。荒。魂。は。み。進  
み。給。ふ。おと。を。彼。奇。魂。は。奇。おと。空。お。悟。ま。し。て。幸。魂。は。幸  
子。助。け。給。む。む。還。坐。る。おと。有。べ。き。故。海。原。と。依。來。坐  
る。也。崇。神。天。皇。卷。七。年。の。処。よ。大。御。夢。よ。大。物。主。神。の。現。ま  
て。以。吾。兒。大。田。根。子。令。祭。吾。則。云。く。海。外。之。國。自。當

歸。伏。と。御。誨。し。坐。る。が。其。如。く。為。給。ひ。し。り。む。後。お。果。して。  
海。外。人。の。參。來。し。を。も。思。ふ。ほ。ほ。し。外。國。の。事。を。も。掌。給。ふ  
こと。著。明。き。但。し。其。め。産。靈。大。神。は。幽。ふ。御。量。坐。る。よ。依。こ  
ま。お。を。や。お。お。る。は。言。は。く。も。更。お。は。は。と。か。く。御。身。を。分。ゆ。お。を。を。  
和。魂。の。み。お。ら。び。荒。魂。も。御。身。を。分。けて。功。業。成。為。給。ふ。こ  
と。何。也。大。國。御。魂。神。と。申。は。る。即。荒。魂。神。は。分。り。給。子。ゆ。時  
は。御。名。お。ぞ。有。る。ゆ。但。し。そ。は。大。國。主。神。は。み。お。ら。ぬ。卓。ま  
る。を。悉。く。其。事。の。見。え。さ。る。が。多。り。は。い。○。青。垣。お。を。青  
か。お。る。事。お。う。記。し。洩。せ。ゆ。も。有。べ。し。  
山。は。國。の。垣。と。お。して。周。廻。ま。ゆ。を。云。お。と。既。よ。師。説。を。舉  
て。注。せ。り。也。第。八。十。七。段。此。傳。見。べ。し。此。布。師。説。よ。此。を。垣。お。用。は。無。れ  
ど。お。が。山。の。お。を。常。お。青。垣。と。云。お。ら。る。故。よ。如。此。云

の。未と下よ引く。出雲、因造神賀詞。皇孫命能。近守神登  
貢置天。とある意。其鎮坐むとほる處も。倭國を衛護  
は垣か依意よて。如此云ふも有べしとあり。○東山を  
師云。御諸山を倭の國中に東方よ在て。其山次まよとふ  
垣如也。但し東山と詔牙依を。あぐ汎く東方の山を云ふ  
せあるはきを其東方山の中よ就て。御諸山をば擇びて  
祀すしれ依は。又思ふよ。東方此山と云ふと形らば。東  
之青垣山を有べき。青垣を上よ置て。東山を依は。一  
の山名を指るが如くも聞ゆ。故考ふる。神名帳大神社の  
次。小神坐日向神社。大月次。あり。貞觀元年よ。從五位上を  
新嘗。授奉らば。三代實録よ見

此社三輪山に巔に在て。今高宮と稱は。若宮とも云  
せ。或書小云。然れむ御諸山の舊名日向山と云ひし。若  
然らむ。此よ東山とあるよ依て。彼神社の日向をめ。比  
牟加志と読べし。舊名は。此神社に残るあり。○日の出  
る方を東といふも。即日向の意あり。山上を。峯を云ふ  
限らば。まよ山邊に意よめ非也。あぐ山を云ふと形也。山  
邊と云ふも。野邊と云ふも。皆と云ふ海岡野と云ふ。○伊都  
伎奉。去れ語上よ。出て。既よ注せ也。第二十五段。奉は  
祭祀あり。あぐ尊み。添多云。辭に奉ふを非也。と師に  
言れとるが如し。但し。祭稱に奉も。言の。はて大  
因主神に和魂の大美和。鎮座の意あり。あり。はて大  
因主神に和魂の大美和。鎮座の由縁は。右に如くあるよ。  
出雲、因造神賀詞よ。天下に現事

をむ。皇美麻命ふ事避奉<sup>サリ</sup>巳給ふ時ふ。皇美麻命の近守<sup>キ</sup>神  
ふとて己<sup>オレ</sup>命<sup>ミコト</sup>此和魂を大美和よ坐奉<sup>マカ</sup>巳給<sup>タテマツ</sup>予<sup>カミ</sup>めと有は傳  
の異あるよ似とまど然<sup>シカ</sup>やを非<sup>ヒ</sup>交。此を師説ふ天下よ因  
をしも多<sup>オホ</sup>久<sup>ク</sup>流<sup>ル</sup>ふ。今かく倭<sup>ヤマト</sup>因<sup>ヰ</sup>ふしも齋<sup>イキマツ</sup>記<sup>キ</sup>れと詔<sup>ミコトノコト</sup>給<sup>タテマツ</sup>ふを。  
後<sup>ノチ</sup>遂<sup>ツヒ</sup>ふ皇美麻命。御く代<sup>カヘ</sup>く此近守<sup>キ</sup>神とあり坐<sup>マカ</sup>むの御心  
ありしとと著<sup>イハ</sup>明<sup>シ</sup>れ<sup>ル</sup>れむ。彼神賀詞よを其所を云<sup>イハ</sup>流<sup>ル</sup>も此  
れ<sup>レ</sup>。或人書紀の此段の注よ大己貴命みお<sup>ミ</sup>ら<sup>シ</sup>己<sup>ミ</sup>が魂  
を齋<sup>イキマツ</sup>きて神とあ<sup>ハ</sup>と<sup>ハ</sup>ふと思<sup>オモ</sup>ふを誤<sup>アヤマ</sup>り。三諸山よ  
記<sup>キ</sup>に己<sup>ミ</sup>が魂<sup>ミタマ</sup>を齋<sup>イキマツ</sup>むと云<sup>イハ</sup>る中<sup>ナカ</sup>に非<sup>ヒ</sup>れ<sup>ル</sup>。若<sup>シ</sup>此説の  
如<sup>ス</sup>く己<sup>ミ</sup>が魂<sup>ミタマ</sup>を齋<sup>イキマツ</sup>むが非<sup>ヒ</sup>あら<sup>ハ</sup>バ。い<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>齋<sup>イキマツ</sup>き奉<sup>マカ</sup>れと  
を詔<sup>ミコトノコト</sup>ふ<sup>ハ</sup>ば。凡<sup>ソト</sup>て己<sup>ミ</sup>が私<sup>シ</sup>れ<sup>ル</sup>さ<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>し<sup>ハ</sup>ら<sup>ハ</sup>心<sup>ココロ</sup>を主<sup>ヌシ</sup>として古傳  
を信<sup>シ</sup>じ<sup>テ</sup>ば。この説をのみ云<sup>イハ</sup>ふを皆<sup>みな</sup>神道<sup>カミミチ</sup>を知ら<sup>ラ</sup>ぬもの  
也。其<sup>レ</sup>の流<sup>ル</sup>猶<sup>なほ</sup>末<sup>ノチ</sup>ふ神賀詞あり傳<sup>ツタ</sup>を採<sup>ヒ</sup>て記<sup>キ</sup>せる處<sup>トコロ</sup>に注<sup>ツ</sup>ふ

欠

MISSING

也。今京よて祭とい予む賀茂祭山  
とい予む日枝山あるがごとし。○大三輪之大物主神

也。おを彼鎮座記ふ即營御室於大倭國磯城縣青垣山使

就居故號曰御室山或作三此大三輪大物主神也。とある

お依ます。御名此義ま。其掌給ふ御功業のおを末お

委く云はし。第百二十段。○大國主神之和魂也。彼神賀

詞よ。己命乃和魂乎。倭大物主櫛懸王命登名乎稱天。大御

和乃神奈備爾坐天。と見え孝昭天皇卷ふ記せる。大己貴

神の御誨ふ。我和魂者自神代鎮三諸山而云くと有れど

お依ます。故古事記ふ。此御名を大國主神の亦名を奉と

社と始免て見えと。其外も古書の正しき傳ふ。美和  
社よ就て云と死ハ。此御名を申せる例あり。然るを神代

紀も亦名を數舉よる処も此御名をも出さざし誤を受て古語拾遺も亦名を舉よる処も此御名をも出し姓氏録も大神朝臣あどの條も大物主神之と云はき大國主神之といふ處も數何處も此由を思わざる誤みぞ有けて神名式も大和國城上郡も大神大物主神社名神大月次とある御社はあは文徳天皇紀も嘉祥三年相嘗新嘗

十月辛亥大物主神奉授正三位仁壽二年十二月乙亥加大和國大神大物主神從二位と見え清和天皇紀も貞觀元年正月廿七日勳二等大神大物主神奉授從一位同二月丁亥大和國從一位勳二等大神大物主神奉授正一位あぞ見也大神三社鎮座記も奥津磐座大物主命中津磐座大己貴命邊津磐座少彥名命有三箇鳥井とあり清輔朝臣

の奥儀抄も祭日も三の茅輪を岩上も置て祭ると見え今も鳥居三ありと云ふば古くも大物主神一座ありしを後も大己貴少彥名神を配形も此御社にあは崇せ祭りて三座と為とありと見え神代第二十段○此神之荒神天皇卷も委く注ふは神代第百二十段○此神之荒

魂神者云く此神とを三輪之大物主神を申せ也抑此神はしも大國主神の和魂神と坐るもはと其和魂神も荒魂神の御坐る也式も城上郡も狹井坐大神荒魂神社と

あり神祇令義解も狹井者大神之鹿御靈也と見え師説も大三輪も坐神也大國主神の和魂あるも對へて狹井社を大國主神の荒魂と心得る人あらむ然も混れあらばも大美和神も荒魂あり此義をくせは混れありと云れしを案然も言れ也和魂荒魂はあといハ第二十七段の傳も註せ此御社のおもも崇神天皇卷も委くるを合せ見るは

注ふ  
考し。

於是大圀主神其荒魂與和魂

戮力以廣予爲御杖而撥平圀

中出邪鬼而圀作給矣因亦名

謂八千矛神其圀巡出時到坐

出雲圀手染郷而此圀者丁寧

所造圀也詔而號丁寧矣今人

訛謂手染卽有正倉亦此大神

天御飯田出御倉將造出處覓

巡行矣爾時暴雨久多美能山



トノリタミロシトコロヲイフクタミトマタコノクニハナラズ  
也詔出處云玖潭亦此国者非

カホキカラズチロサカハカニハキノホサシカフカハ  
大非小川上者木穗刺加布川

シモハカハシバハヒワタレリコハニタ  
下者河志婆這度出是者爾多

シキヲクニナリトノリタミロシトコロヲイフニタトマタ  
志枳小国也詔出處云仁多亦

ミツナハシミトコロノサトラテコノトコロノタウルハシカレ  
見行三處郷而此地出田好故

アガミトコロノタトノリタマヒキカレイフミトコロト  
吾御地出田也詔矣故云三處

也。

於是と云を已。謂ハ千矛神と云までは。大倭神社注進状  
小舊記を引て。大己貴神之荒魂。與和魂戮力營天下云々。  
大己貴命以廣示爲杖撥平豐葦原中罔之邪鬼是時大己  
貴命號曰八千矛神とあるを採て文を成せ已。但し本書  
長きを此よ用ある処此み師説の如く。少毘古那神也。常  
を太く抄ぐ宛て引とめ世罔小渡坐る後小大罔主神也。吾獨して何れも此罔を

得作らむ。と愁坐るは。一向ヒタツル小国作らむと思ふに。荒魂の  
み進みて。和魂の徳用イヅトモ乏ヒトケキりしを。上件。和魂神の現來イマキま  
ちて。助タれ給タマふ故ユふが。此車の兩輪フタツク此如く。二ニ此御魂ミタマ此具  
足タらしめて。遂スは。国造クニツクリの功績を成給ナり。此を其荒魂イハヒ與ト和  
魂戮ハ力チカラ云々と。を語コト傳ツへし。お。○以ヲ廣ヒロ予カコ爲シ御杖ミツクサ而ニ廣  
予カコとは。其刃ハ鋒シバ此廣ヒロき由ユれり。ま。八尋ヤチノミ予カコと云も有アま  
ば。八尋ヤチノミ小長コナガ丸御予カコふても有アま。諸サこ此御予カコは。決キ免メて  
大物主神オホモノヌカミ此依ヨ來キ坐マる時トキ。持賜モチタマ予カコ依ヨ蘇ス予カコあるべきを。御  
杖ツクサと衝ツカして。国作クニツクリ給タマへ依ヨれ。天地初發アメノチノハツ此時トキ。天津神アマノハツカミとち。  
伊邪那岐伊邪那美神イセナキイセナミカミ小瓊ヒメ予カコを賜タマひて。御事依ミコトヨし給タマり依ヨ

小符カフひて。渡ワタき由ユ何ナニ依ヨれ。通ト也。後ノチ此コある廣予カコを。皇  
て。吾オレ以此ココ予カコ卒ス。有ア治功チコウ皇美麻命スメマノミコト用ヨ此コ予カコ治チ。国則クニノチ必カナラ當タ平安ヘイアン  
と詔ミコトひ。景行天皇ケイコウテンノウの御世ミヨノヨ。倭建命ヤマトノミコト。東国アヅマノクニを平ヘし。給タマふ  
時トキ。比ヒ羅木ヒラキ之ノ八尋ヤチノミ予カコを賜タマひ。成務天皇ナリノミコトの御世ミヨノヨ。諸シロ国クニ  
国造クニツクリ長ナガ小楯コタテ予カコを賜タマひて。表ウラと。と。予カコの事コト。お。を思オモふ  
小由コユ有アて聞クえ。万葉マンヤフ哥カども。小玉コタマ梓シ乃ノ道ミチ行ユく。ら。多麻保タマホ  
許ヨ乃ノ美知ミチ尔ニ伊泥イニ多知タチお。道ミチて。ふ言コトの發語ハツコト。ふ。お。布フく。詠エ  
る。上ウ。件ケンの由ユ緒オを起オりて。古コ。道ミチを行ユく。お。予カコを杖ツクサと  
依ヨれ。や。と。さ。へ。想オモ像ゾウる。う。岡部オカベ翁オノ。此コ。お。想オモふ。ハ。非ヒ。空カラ  
とて。此コ。と。さ。へ。銚シの身ミと。お。け。さ。る。のみ。あり。と。ち。て。爲ナ  
説ワカま。し。は。返ヘりて。心ココロ浅アサく。覺オも。る。と。い。か。ぐ。有アら。む。ち。て。爲ナ  
字ジを。意イを得エて。都ツ加志カシ氏ウヂを。訓ツば。し。○邪鬼ヤクニを。神代紀カムヤマトノフミ小阿ア  
志シ伎母キモ能ノと。訓ツる。小依コヨ。私記シキ云イハ。安ヤス之ノ岐キ毛モ乃ノと。あり。日本紀ニッポンキ  
此コを。天照大御神アマテラスノミコトの。天石屋戸アメノイシヤドを開ヒて。幽居ユイる時トキ。萬物マンブツ此  
妖オウを。發オせる。惡神アクカミ等トモ。お。依ヨ。鬼オニを。母ハハ能ノと。云イハ。由ユ。乃ノ。第百二  
十段。大物主神オホモノヌカミ此コ下シタ。云イハ。を

見る抑、惡神の初、石屋戸、段、注、如く。伊邪那岐大神。豫母都、固、汚穢、觸、給、御裝束を投棄、了、予、依、因て成、出、て。此事第二十三段の傳を見て知べし。何事、付、ても、世、此、と、め人のと采、善、からぬ事を、此、態、と、行、ふ、神、等、ある、故、よ。彼、廣、予、此、勢、徳、よ、と、て、先、此、を、撥、平、て、固、作、の、功、績、を、成給へる、成、法、し。但し、あ、つ、撥、給、予、ども、是、ま、と、然、る、べき、故と、譬、へ、む、狹、蠅、の、追、ども、く、散、て、ハ、又、集、ま、り、て、妖、を、為、す、此、後、よ、健、御、雷、神、天、降、坐、し、て、逐、ひ、給、予、り、然、れ、ど、猶、残、ま、る、も、有、り、搦、た、れ、と、る、が、ま、と、寄、來、お、る、も、何、故、よ、人、世と、あ、り、て、も、古、く、荒、振、神、を、平、給、ふ、お、と、世、く、お、聞、え、中、今、お、至、り、お、め、世、よ、種、く、の、妖、物、を、多、く、ぞ、有、る、お、然、れ、む、此、め、ま、と、然、る、べき、幽、き、由、何、る、事、と、は、知、ら、ま、と、也、猶、末、く、お、も、注、ふ、を、見、る、法、し。

○八千、示、神、と、申、ひ、御、名、上、お、注、予、り。第七、八、段、の

傳、見、る、  
○手、染、郷、出、雲、風、土、記、お、嶋、根、郡、手、染、郷、所、造、天、下、大、神、命、詔、此、固、者、丁、寧、所、造、固、在、詔、而、故、丁、寧、負、給、而、今、人、猶、誤、手、染、郷、云、耳、即、在、正、倉、と、何、也、丁、寧、ハ、多、志、と、訓、法、し、然、ら、ざ、れ、む、手、染、と、云、よ、由、お、し、古、事、記、允、恭、天、皇、卷、の、歌、よ、宇、都、夜、阿、良、禮、能、の、打、や、霰、多、志、陀、志、爾、云、く、多、志、陀、志、を、慥、く、お、也、雄、畧、天、皇、此、大、御、歌、お、も、多、斯、爾、波、章、泥、受、と、見、え、寢、お、ち、率、お、不、慥、て、ふ、言、は、万、葉、十、二、お、慥、使、乎、無、跡、也、も、何、也、さて、此、よ、依、て、注、せ、る、が、お、お、思、ふ、よ、正、と、云、ふ、ち、て、此、郷、は、風、土、言、を、多、志、陀、志、の、約、き、依、語、ある、べ、し、  
記、お、郡、家、正、東、一、十、里、二、百、六、十、四、步、と、何、也、抄、よ、手、染、郷、野、原、別、所、下、宇、部、五、村、也、と、云、り、神、世、お、ち、多、志、と、号、と、何、ひ、し、を、天、平、の、頃、お、多、志、美、也、誤、也、抄、よ、多、須、美、也、ある、を

まゝ後の  
訛あり。○正倉とは、祠あると既ふ注す。第七十三段の傳見

し。但し此祠を。今詳れらば。○天御飯田とを。田を多く

作給ひ乃む中ふ。みぢのる聞食は御飯此田を。御飯田と

いひ。天を稱言あり。其稻を納ゆ。御倉を。御飯田之御倉を云

お依る。○暴雨久多美山。暴雨を。本ふ波夜佐雨と何。○

字鏡よ。暴雨まよ。暴雨降來る雨をいふ。久多美山を。舊

と云。此名と聞ゆ。大神あ。よ巡行せる布どふ。暴雨の降

るむ故ふ。暴雨降美と連け詔す。倭姫命世記よ。連

る。はや雨降る。○玖潭ハ本ふ。楯縫郡玖潭郷。郡家正西

五里二百歩云。故云。忽美。神龜三年。改字。玖潭。と何。○

即本文よ採れる傳説あり。ちて舊く忽美とかはる。忽を  
許都の音お依を。久多ふ轉用せるあり。後よ玖潭を。け  
る潭を。多半の音ある。和名抄ふも。玖潭を。作。風土記  
多美子轉用せ依れり。久多美村。東郷。福井。海苔。石谷。鎌  
浦。十六島。古津。為。一郷。といへり。神名式よ。當郡ふ。玖潭。神  
社あり。風土記ふ。在。神祇官と云。る社の中よ。久多美。社と

何。即是あり。風土記抄よ。久多美村。○非大非小。大那

良受。小加良受。と訓べし。非を。不。字。此。○木穂判加布。木。樹

枝の刺相ふ由。判を。刺の古。跡あり。諸本判ふ。作。ハ

字。字。書。よ。見。え。或。皇。國。字。う。と。思。ふ。よ。さ。非。じ。刺。字。の。注

お。同。刺。見。釈。典。と。何。り。然。ま。バ。此。字。を。今。の。如。く。寫。誤。れ。る

あるべし。字形。○河志婆。這。度。之。河。を。阿。よ。作。る。本。を。誤。る

や。似。と。何。○河志婆。這。度。之。河。を。阿。よ。作。る。本。を。誤。る

水楊葦あざれ水邊よ生茂れ依を今も川柴と云子む其  
 ぬるげし。○爾多志枳小圀と云。本小楯縫郡沼田郷の傳  
 小。宇乃治比古命。以爾多水而御乾飯爾多爾食坐詔而爾  
 多負給之。然則可謂爾多。今人猶云努多耳とある爾多と  
 同言ふて。今俗言ふ。爾多都久といふ爾多ふ依べし。師說  
 亦多てふ言を俗言よ。ニチヤク。ニチヤツク。凡と云と  
 物。の又タと云も。同言の轉あり。せ言  
 れある由。眞竜。グ風土記解よ記せ。小圀と云。圀を稱ふ  
 依言ふ。然れ。云文意。此地在大きくも非。小くも非。交  
 程宜くて。其川上は木枝さし相ひ川下を河柴生茂れる  
 故。爾多。云く土に潤ひて。好地。云と詔。子。義。云。眞  
 竜。

說を信。ちて此を謂も。仁多郡。凡れ。○三處郷。本。小。仁  
 多。郡。三處郷。即屬郡家。大穴持命詔。此地。田好。故。吾。御。地。田  
 詔。故。云。二處。と。云。田。詔。二。字。本。古。經。と。誤。れ。云。今。三。は  
 御。云。文。意。は。此。地。の。田。好。れ。云。己。命。の。御。上。田。ふ。せ。む  
 と。詔。子。依。由。云。抄。よ。合。上。下。三。處。村。富。田。簾。琴。枕。高。芝。久  
 原。角。木。石。原。里。田。馬。馳。矢。谷。廣。瀨。湯。原。  
 神。畑。郡。村。等。九。三。所。為。三。處。郷。と。あり。

爾大地主神。營田出時。田人令

食牛穴矣。于時。御年神出御子。

至其田而唾御饗還坐而於父  
イタリソノタニテツバキテニアヘニカヘリマシテニ三チ  
 告其狀出時御年神怒坐而於  
マラスソノサマトキニ三トシノカミイカリマシテニ  
 其營田放給蝗矣於是苗葉忽  
ソノツクダハナチタマヒイナムシラキコ、ニナハノハタチマチ  
 然枯損而似篠竹矣故大地主  
ニカレソコネテナレシノダケキカレオホトコヌレノ  
 神令片巫カミシテカタカムナキ志止シトヒチカムナギラ肱巫イノヨノカマノワ  
止鳥。及米占也。

占求出則此者御年神出崇也。  
ウラトハシメタマヘバコハ三トシノカミノタリナリ  
 故獻白豬白馬白雞而宜解其  
カレタテマツリシロキ千シロキウマシロキカケラテタマヘトナゴシソノ  
 怒白矣故依其教而奉謝御年  
イカリヲマラシキカレマニマソノヲシヘノニマラシタマフ三トシノ  
 神出時御年神答曰實吾意也。  
カミニトキニ三トシノカミコタヘタマクマコトニワガニコノナリ  
 故以麻柄作持而持出乃以其  
カレヲアサガラツクリカセギニテカセゲスナハチモテソノ

ハヲハラヒモテアノカシクサヲオシソヲモテカラスアズギラ  
葉拂出。以天押草押出。以鳥扇

アフゲナホズサラハニミゾグチオキウレノレヲ  
扇出。仍不去。則於溝口置牛穴。

ツクリヲバシラノカタヲテソヘソレニヲツスノニナルハジカニ  
作男莖形而加出。以蕙子山椒

クルミノハマタレホタマヘアガチオキソノアニトコト  
吳桃葉及鹽。宜班置其畔也言

ヲレヘタマヒキコ、ニオホトコヌレノカニマニソノヲレヘ  
教給矣。於是大地主神。從其教

ニオコナヒタマフトキニナヘノハマタレゲリテタナツモノユタカニ  
而行出時。苗葉復茂而。年穀豐

ミノリキコレイマモテシロキ干シロキウマシロキカケヲマツル  
稔矣。此今以白豬白馬白雞。祭

ミトレノカミヲコトノモトナリ  
御年神出緣也。

此段を大同二年小忌部廣成宿禰此記さまと依。古語拾  
遺を採れるおと。既よ徵ふ云るが如し。○大地主神と申

おホトコヌシ  
ひを。大國主神の荒魂。大國御魂神此亦名あるおと。既ふ  
云るが如し。第七十八段の傳見べし。然るふ此條よ。其御名を以て語



已傳とるまを由あるべし。試よ言はく。田を作るもた、其  
み清むべき事あるよ。其田人  
の進びありとふ意をもて、此御名よて語り傳へしふや。  
○田人ぞを御田を作る人をいふ。○牛は馬と共ふ。宇氣  
母智神の御頂ふ成きて。營田ふ要とある畜物あり。然る  
ふ其実を田人よ食し先給子ゆえ。最も甚じ先御過失ふ  
ぞ有るゆ。阿那畏。○于時を義を得て。曾能時と訓げし。○  
御年神の御名を。上ふ出て既ふ注子也。第七十四段の其  
傳見るべし。其  
御子神也御名は。今知はうらば。然れど父神を共ふ。田を  
巡見て幸へ給ふ神と聞ゆ。其を至其田而とあるもて知  
られと也。○唾御饗を古は田を作るふは。先御年神と

ちふ御饗を奉りて。祭れと聞えと也。今も所ふとりて  
た。田業を始むる  
時よ。かあらば田神祭とて。御饗を備へて然るふ其御饗  
祭を礼せ所あり。古の遺れる道あり。はしも。牛、穴を食とる田人也。調へふゆ故よ。穢ハし死を  
惡ひて。唾し給へゆあり。前ふ伊邪那岐命。そは妹伊邪那  
美命也。豫母都戸喫し給子る。汚穢き御有状を惡ひて。族  
離むと詔ひて。唾し給へゆ事あり。第十九段の皆甚く其  
事を惡ひ給ふ時の御所爲あり。まよ此よ依て。神ふ奉る  
物ふ汚気ありては。受給  
たぬれみあらば。却りて御怒○蝗は和名抄よ。爾雅註云。  
ふふる。おとをも辨ふべし。蝗、和名於保。食苗心。曰螟食葉。曰蝻食節。曰蠶食根。曰蝻蝗。  
和名無之。總名也とあり。然れども。舊く伊邪牟斯と訓るふ依べし。

蝗とは稻いねに於く虫の總名ある由ふて。今も總スベテて稻いね蟲ムシと云いふはれり也也。和名抄よ。於保祿无之とあるを。或説ふ。大稻虫の義りと云り。然も有べし。稻を害ふ虫あり。ちて此に故事に依て思ふ。稻よ蟲の於くおどむ。  
御年神の御怒いかりに觸ふるはまりバ。農人おどは。此を熟思よくしひて。畜物ケダモノに類を食タむはことは更も云いふも云いふも穢カガシをとく忌清よむはぎき事ことふあそと。○似を那志を訓はし。爾須ニルと同言いふは依よると既よ注すは也也。第三十二段の傳見べし。如字おどを那須を訓も。即るの字に義あり。○片巫志止。及今俗竈輪米占也也。和名抄よ。説文云。巫祝女也。和名加牟奈岐文字集略云。覲男祝也。乎乃古加牟奈岐と何也也。然れど直ただふ巫と云は神に仕奉りる女を云稱いふ也。但し男祝

を乎乃古加牟奈岐と云は有まど。此加牟は神那岐也。も常ふを直よ。加牟那岐とのみ云ゆ。加牟は神那岐也。令和の約いれるふて。神を令和奉りとす也也云いふも云いふも言いふ也也也。具志ハ依よちて此に那な岐ぎを泥岐ぎと通ひて。神に仕奉る人を禰宜ニキといひますと泥ね疑ぎ言ごん勞ら良ら布ふあぞ云いふも。同語ありと云いふも云いふも似にある事ことあり別わかれり也也。祿宜まと泥疑言。勞らふれど云詞の意を。第五十三段まと景行天皇卷に傳あり。ちて巫に業に。もはらどよ注せる。師説を見て知べし。  
女に仕奉依よこすは。天あま宇う受う賣う命みことの。天照大御神に御前みまへに仕奉りるも也也事こと發はりて。其その御み裔えきに猿女め君きみ等ら。世よに神和やまに職に奉仕りるも也也。起おこれる事ことあり依よちて。御み巫まじに職も是とす也也。起おこまりと通ちまさむあら也也。御巫の事を。既よ第七十四段に傳よ注るを見べし。

て片巫肱巫といふ稱は義を未思得也。古語拾遺節解といふ物よ片を肩  
 みて肩と肱せふて男女を分ち男巫女巫を云々と云ひ  
 信友も肩巫肱巫よてそは神よ仕るとあてて其神の御  
 心の任ふ肩肱如く功しく仕奉る由の稱よて中世  
 たり此言よ君の御心此任よ功あく奉仕る臣此ことを  
 君此手足とありて仕奉るあど云牙は趣お似とゆ漢因  
 よて股肱臣れぞ云も同じ心むへありと云牙也然も有  
 也然れぞ神世とて此古稱は聞えとて然るよ就て  
 片巫の下ふ志止く鳥と云ひ肱巫此下ふ今俗云くとあ  
 依廣成宿禰此自注をいせ心得のとし然依を令片巫肱  
 巫占と何れぞ古さ依名を負る巫此有志よ命せて令占  
 然給へる義あ依ふ注は様ふてを片巫とは志止く鳥此  
 あと肱巫とを今俗よも行ふ竈輪占米占此事ぞと云依

如く聞えて混ハしられをあて故考ふ依ふ古語拾遺を  
 奏進られし大同の頃ふも猶片巫肱巫と稱よ負ふ巫何  
 りて片巫と云ふは志止く鳥よて占ひ肱巫ぞ云ふを竈  
 輪占はと米占あどを爲るむ故り其趣をもて神世の片  
 巫肱巫ふ自注を下さましふや。かく見ばてを此此文義を何とも解べき由あり  
 其をま抄志止く鳥は天武天皇紀九年三月此處ふ攝津  
 因貢白巫鳥。巫鳥此言を芝苔を見え和名抄ふ鴟鳥唐韻云鳥名  
 也。音巫漢語抄云巫鳥之止くと何也。字鏡よを鴟志止くとあり漢土の字書等あり  
 鴟雀也とも雀屬也とも云ひま雀は小鳥此總名ある  
 由よも云牙り本草よを鴟を見えは貝原第信説よあど  
 ぞは雀の類乃鳥を總て云名ありと云ふハ違へり此鳥  
 を今人もとく知て青じとも青あやとも云てま抄ま

あき鳥あまカサネ高雀と云も是れりカサネかかくて此鳥を占ふ用と依るまきは。物不見えカサネ谷川氏を。人麻呂家集をいふ物よ。巫カサネ此カサネやや小鳥よ物問をむ。我思ふ人よい於の逢ふカサネ逢きと何依歌を引て。此謂カサネ鴟也と云カサネ予れど。然も思をまカサネび。其カサネこのといふ物を。清輔朝臣の袋冊子カサネふも引とれを。古くを有れど。後人此集をカサネとる物あまカサネ信カサネぐとく。殊カサネよ多カサネ小鳥まど大のとの趣を。由カサネありげカサネ聞えとめ。然カサネふを有れど。古語拾遺カサネふかく記れカサネまは。當昔カサネ此鳥を用ひて占カサネふ事此カサネ舊カサネとカサネ傳カサネハカサネ有カサネしカサネあカサネとカサネをカサネ炳カサネし。信友説カサネ志止カサネくカサネをカサネもト事カサネひカサネるカサネあカサネとの有カサネしカサネふカサネ依カサネてカサネ鴟カサネ字カサネをカサネ此カサネ方カサネふカサネてカサネ製カサネれるカサネ字カサネふもや有カサネむカサネ神功皇后御誓坐カサネてカサネ年カサネ魚カサネをカサネ古事カサネのカサネ占事カサネふも通へるを思ひて。鮎字を製れる類カサネひ漢字カサネと同カサネ躰カサネりて。其原の異ある例も多カサネりカサネめカサネと云カサネ依カサネるカサネ然カサネるカサネ説カサネよカサネてカサネ漢字カサネよカサネ鴟

と作るを。鮎字の符カサネる類カサネあカサネ依カサネうカサネまカサネと若くは彼因カサネふカサネても古く此鳥を。巫祝カサネ此徒カサネ此用カサネとる事ありしカサネ因カサネてカサネ作れるカサネふも有カサネべしカサネそを彼処カサネふも古くカサネ雞カサネ上カサネ鼠カサネけカサネてカサネ龜輪カサネと何依ト。米トあど云も有カサネしカサネと聞カサネめカサネまカサネはカサネあカサネ也カサネ。けカサネてカサネ龜輪カサネと何依も。占事カサネをカサネ聞カサネめカサネまカサネはカサネ。是カサネまカサネと詳カサネれカサネぬカサネがカサネ。袖中抄カサネふカサネ俊頼朝臣カサネ此カサネけカサネらカサネひカサネ巫カサネ依カサネ室カサネ此カサネ八嶋カサネの事カサネあカサネひカサネふカサネ身カサネの成カサネをカサネてカサネむ程をカサネあカサネるカサネ哉カサネと詠カサネまカサネしカサネ歌カサネをカサネ擧カサネてカサネ。けカサネらカサネむカサネとをカサネ。擢カサネと書カサネ也カサネ。掃除カサネ巫カサネ依カサネをカサネ云カサネ。室カサネ此カサネ八嶋カサネとをカサネ。龜戸カサネ字カサネ云カサネ也カサネ。古髓腦カサネふ見カサネ也カサネ。今ふカサネよカサネ。古髓腦カサネよカサネ。室カサネの八嶋カサネをカサネはカサネ。龜戸カサネをカサネ云カサネといカサネ予カサネることカサネ。龜戸カサネ神カサネをカサネ。大八嶋カサネ。龜戸カサネ神カサネとカサネ。因カサネ史カサネよカサネあるカサネふカサネ由カサネあカサネ也カサネ。げカサネありカサネ。下野カサネあるカサネ室カサネの八嶋カサネもカサネ。煙カサネ此カサネ起カサネ處カサネあカサネまカサネ也カサネ。其カサネよカサネ思カサネ寄カサネれるカサネよやカサネ。此カサネをカサネ除カサネ夜カサネふカサネ。民カサネ此カサネ龜戸カサネをカサネ擢カサネひカサネてカサネ。來カサネむカサネ春カサネ。年カサネ内カサネ此カサネ事カサネの吉凶カサネ。みカサネあカサネ見カサネめカサネると云カサネ也カサネ。火カサネ字カサネ日カサネふカサネ何カサネてカサネ。消カサネもカサネ消カサネぬカサネを見カサネて

知あども申<sup>ス</sup>終<sup>ル</sup>事おひとは見むを思ふおを乞ふ  
 也。其<sup>レ</sup>ふ吾身の成果<sup>ナリ</sup>むぢぢを知るとれ也。と有<sup>ル</sup>を谷川氏  
 も引て。此近<sup>ニ</sup>竈<sup>ノ</sup>輪<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>乎<sup>レ</sup>也。窠<sup>ノ</sup>も似<sup>ス</sup>依<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>れぬ。此<sup>ト</sup>事<sup>ナ</sup>  
 出羽此秋田あぢよて除夜<sup>ノ</sup>大豆<sup>ヲ</sup>圍<sup>キ</sup>爐<sup>ニ</sup>裡<sup>ニ</sup>火<sup>ハ</sup>此<sup>ハ</sup>まはり  
 ぬ丸<sup>ク</sup>輪<sup>ノ</sup>如<sup>ク</sup>竝<sup>テ</sup>火<sup>ヲ</sup>移<sup>シ</sup>て黒<sup>ク</sup>焼<sup>ル</sup>と白<sup>ク</sup>焼<sup>ル</sup>  
 るとを見て來年<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>晴<sup>ル</sup>雨<sup>ハ</sup>吉<sup>凶</sup>を卜<sup>フ</sup>事<sup>ナ</sup>り似<sup>ト</sup>  
 依<sup>ル</sup>事<sup>ナ</sup>あまぢ竈<sup>ノ</sup>輪<sup>ト</sup>と竈<sup>ノ</sup>戸<sup>ハ</sup>輪<sup>ヲ</sup>を丸<sup>シ</sup>て占<sup>フ</sup>由<sup>リ</sup>此<sup>ノ</sup>稱<sup>ナ</sup>  
 らむも知<sup>レ</sup>て米<sup>ヲ</sup>占<sup>セ</sup>云<sup>フ</sup>も詳<sup>カ</sup>らぬ稱<sup>ナ</sup>ど。信濃<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>諏訪<sup>ノ</sup>神社  
 にて正月十五日<sup>ニ</sup>神前<sup>ニ</sup>竈<sup>ノ</sup>戸<sup>ヲ</sup>を多<sup>ク</sup>て金<sup>ノ</sup>小<sup>豆</sup>粥<sup>ヲ</sup>を煮  
 て。蘆<sup>ノ</sup>の管<sup>ヲ</sup>を五六寸許<sup>ニ</sup>お切<sup>テ</sup>作<sup>リ</sup>と作<sup>ル</sup>物<sup>ノ</sup>限<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>印<sup>シ</sup>  
 る。其<sup>ノ</sup>金<sup>ノ</sup>ふ入れて。其事<sup>ヲ</sup>を掌<sup>ル</sup>禰<sup>宜</sup>傍<sup>ニ</sup>居<sup>テ</sup>箸<sup>ヲ</sup>をもて其  
 管<sup>ヲ</sup>を出<sup>シ</sup>。其<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>牙<sup>ヲ</sup>米粒<sup>ノ</sup>の入<sup>リ</sup>は依<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>物<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>豐<sup>凶</sup>を

トふ。此を筒粥<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>神事<sup>ト</sup>と云<sup>フ</sup>ぞ。是若<sup>ク</sup>は米<sup>ヲ</sup>占<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>名<sup>ハ</sup>殘<sup>リ</sup>ふ  
 ち非<sup>ジ</sup>じう。但<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>神事<sup>ト</sup>諸<sup>ノ</sup>國<sup>ノ</sup>古<sup>ノ</sup>社<sup>ニ</sup>を行<sup>フ</sup>處<sup>ニ</sup>あ<sup>ル</sup>と  
 石<sup>卷</sup>神<sup>社</sup>河<sup>内</sup>國<sup>ノ</sup>枚<sup>岡</sup>神<sup>社</sup>を始<sup>メ</sup>其<sup>ノ</sup>餘<sup>モ</sup>多<sup>ク</sup>聞<sup>ク</sup>と<sup>ル</sup>が  
 中<sup>ニ</sup>上<sup>野</sup>國<sup>ノ</sup>榛<sup>名</sup>神<sup>社</sup>とて筒<sup>粥</sup>神<sup>事</sup>とて右<sup>ノ</sup>の占<sup>ハ</sup>あ<sup>ル</sup>は  
 小<sup>豆</sup>粥<sup>ノ</sup>事<sup>ナ</sup>り故<sup>ニ</sup>諸<sup>ノ</sup>の作<sup>ル</sup>物<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>名<sup>ヲ</sup>書<sup>キ</sup>と<sup>ル</sup>右<sup>ノ</sup>の占<sup>ハ</sup>あ<sup>ル</sup>は  
 おきて年<sup>々</sup>其<sup>ノ</sup>下<sup>ニ</sup>粥<sup>ヲ</sup>占<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>豐<sup>凶</sup>を印<sup>シ</sup>て普<sup>ク</sup>農<sup>人</sup>ふ  
 此<sup>ノ</sup>第一<sup>ト</sup>の物<sup>ナ</sup>り社<sup>ニ</sup>人<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>傳<sup>ハ</sup>りとぞ。此<sup>ノ</sup>伊<sup>弉</sup>那<sup>ノ</sup>作  
 美<sup>命</sup>の火<sup>神</sup>此<sup>ノ</sup>荒<sup>ビ</sup>を鎮<sup>メ</sup>む此<sup>ノ</sup>料<sup>ハ</sup>生<sup>給</sup>へる物<sup>ナ</sup>り。諸<sup>ノ</sup>老  
 物<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>種<sup>ヲ</sup>を貯<sup>リ</sup>おくは必<sup>ズ</sup>此<sup>ノ</sup>物<sup>ヲ</sup>納<sup>メ</sup>置<sup>ク</sup>べき物<sup>ナ</sup>り。老  
 農<sup>ノ</sup>の云<sup>フ</sup>を思<sup>フ</sup>ひ合<sup>フ</sup>る由<sup>リ</sup>有<sup>ル</sup>げある事<sup>ナ</sup>り。ちて此<sup>ノ</sup>神  
 事<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>也。此<sup>ノ</sup>正月<sup>十五</sup>日<sup>ニ</sup>あり。ま<sup>と</sup>筒<sup>ヲ</sup>竹<sup>ヲ</sup>用<sup>フ</sup>る社<sup>ニ</sup>も  
 あり。粥<sup>ノ</sup>も小<sup>豆</sup>を入<sup>レ</sup>さ<sup>ル</sup>は數<sup>ハ</sup>あり。ま<sup>と</sup>筒<sup>ヲ</sup>竹<sup>ヲ</sup>用<sup>フ</sup>る社<sup>ニ</sup>も  
 あり。船<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>おど<sup>ノ</sup>物<sup>ヲ</sup>を失<sup>フ</sup>ひと云<sup>フ</sup>事<sup>ナ</sup>り。其<sup>ノ</sup>風<sup>波</sup>の難  
 ぬ逢<sup>フ</sup>海<sup>上</sup>お漂<sup>ヒ</sup>方<sup>角</sup>を失<sup>フ</sup>ひと云<sup>フ</sup>事<sup>ナ</sup>り。其<sup>ノ</sup>風<sup>波</sup>の難  
 ぬと伺<sup>フ</sup>業<sup>ハ</sup>丸<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>ま<sup>と</sup>方<sup>角</sup>を幾<sup>分</sup>お入<sup>レ</sup>ても小<sup>き</sup>紙<sup>ヲ</sup>  
 書<sup>キ</sup>て。此<sup>ノ</sup>米<sup>ヲ</sup>上<sup>ニ</sup>お件<sup>ノ</sup>の關<sup>ヲ</sup>を此<sup>ノ</sup>せ<sup>さ</sup>て伊<sup>勢</sup>の<sup>大</sup>御<sup>神</sup>此

御祓箱を其上ふかざし能く祈念ままむ其闡一其御祓  
よ於く字取て御誨と心得るおとあり此を米占といふ  
と云り船中よ限らば餘事よ付て伺ふ御驗有ゆせい牙也  
けりて志止く鳥龜輪米占  
此事ハ。まぢ如此強説を爲おぼせどめ。此時必しも。右の占  
事どもを行ひとすとは定はらば。太非を更おめ。餘ふ  
ぬ古む。ト事數ありしうむ。何トふても有はし。○猪馬む。  
既ふ出とす。雞を次段ふ。八千矛神の御歌ふ。爾波都登理。  
迦那波那久と見え。万葉む。家鳥可雞とも。庭津鳥可雞  
ども詠す。縣居翁説ふ。雞は人此家庭ふ栖て。名を加那と  
云故ふ。家津鳥。庭津鳥ふども。語を冠らせとほよて。雉ふ  
野津鳥と云ぐ如し。神樂歌ふ。庭鳥むかえろと鳴ぬ。と歌

ふよ依るふ。彼が鳴聲もて。迦那とを呼ぶ。加り理くせ  
鳴はくよ。鴈加良くと鳴む。あよ鳥を云如き類何あし  
物ふも多し。此うけを家雞の字音に様よ云人あり。此の  
可雞と書した。やあぎを楊奈伎う。於を鳥梅と。ぞ有す。猶  
書るよ同く。とす來る字を借とるのみあり。  
次段。八千矛神の御歌。下ふ注。師説を見はし。○解む。  
意を得て。那基斯と訓べし。令和す。○依る麻爾麻と訓  
はし。○奉謝を麻袁志賜布と訓む。即田人ふ牛肉を食し  
於給する罪穢の怠を謝し給ふれぬ。○實吾意也。おを崇  
神天皇卷ふ。此天皇之御世。役病多起。人民死爲盡。爾天皇  
愁歎而坐神牀之夜。大物主大神顯於御夢。曰。是者我之御

心云く。垂仁天皇卷ふ於太非占相而求何神之心爾崇出

雲大神之御心也。とあるを始免數所不見えと也。委くを

皇卷ふ注ふ。○麻柄カマ。麻の皮を取て柄あり。○持カマ。龍

田風神祭祝詞ふ。比賣神ふ奉物此中よ。金能カマ。持カマとある處

の加茂翁考よ。大神宮式よ。金銅加世比二枚。長各九寸六分

分。万葉六ふ。をと免らぐ績麻ウツミ繫カタとふ鹿背カ之山を詠みし

山を因史ウツミ。梓山を書しあどを見ゆふ。梓は績ウツミ苧ヲを懸る

器モと聞也。加世比といふ苧。杯の事々と云。今田舍女ウツミ此縁

車ルふ懸ルと係ヲを篋ヲへ卷取ヲをかそふと云ひ。然せし系ヲ茂

加そひ系と云ひ。其系を煮ニる粘水ノリを苧ヲがせ粘リといふ。然

らば彼篋ヲ此系ヲ引懸る物字。梓と云はし。其状を。

かくの如し。此を近世ニふ。女此手ゆさを書し物の中ニ見

也。誠よちぞ有レべきとあり。紀マと谷川氏ノ説ハも元正天皇

俗ニ荷ルも加世ニふもあぞ云ハ也。系ヲ加世ニと云ハ此義ヲ

具ヲ加世ニ岐と云ハ器アリあり。世渡ノ己ガを加世ニ岐と云ハ此

弄ヲ俗ニ字ニふて聖武紀ニあり。モテアソブト訓ハ也。此ノ字ノみハあら

て偏ヲを木ニも手ニも相通ハして書コト。此ノ字ノみハあら

ば例ニいと多ク也。新撰字鏡ニも梓ヲ加世ニ比ト也。然レれど

舊訓ニふかせぎとあり。今もかせぎと云ハ古ニめサも云

けむ。持カマ之カマ。舊カマく加世ニ宜トと訓ハふ依カマはし。加世ニを岐ニ具カマ宜

詞カマあカマちて加世ニ具カマとは加世ニ比ト也。苧ヲを持カマ繫カマるとしれ也。書カマ

葉をもて拂子也。○天押草ハ本草和名。玄參和名於之久佐と。是れるは。和名。字鏡も同じ。天とは。天日蔭。天吉葛。の天。同じ。押之とは。虫。枯し。損子。は。苗を。押直し。廻るを云べし。袖中。謂。押直。虫。喰。云く。也。○鳥扇。和名抄。本草和名。射干。一名鳥扇。和名加良須阿布岐と。扇之。此。草扇の状。似と。る。故。其。葉をもて。苗。付。ある。虫。を。扇。げ。と。也。伊勢。御田植の時。檜木。よて。檜扇。を作。宝珠。を。赤く。書。と。る。を。以て。苗。を。扇。げ。む。稻。を。虫。食。べ。といふ。此。遺意。あり。云。云。然。も。○溝口。は。其。田。の。溝口。前。小。田。人。が。牛肉。を。喰。子。故。田。も。稻。も。汚。と。を。怒。て。其。を。好。む。稻。虫。茂。

放給へるよ。今。は。如此。牛。穴。溝口。置。け。と。誨。給。ふ。神。此。御意。を。知。法。の。ら。と。試。よ。云。く。溝口。を。田。水。の。落。流。所。ある。故。其。處。此。穴。を。置。て。虫。を。集。め。て。流。さ。む。此。御慮。よ。や。○作。男。莖。形。而。加。之。男。莖。は。舊。く。袁。婆。斯。良。也。も。袁。婆。斯。と。も。袁。婆。勢。と。も。訓。也。和名抄。小。房。内。經。云。玉。莖。男。陰。名。也。楊。氏。漢。語。抄。云。廩。破。前。一。云。麻。羅。今。按。玉。篇。廩。也。の。也。太。秦。牛。祭。文。此。病。名。大。間。ま。と。間。風。お。ど。の。也。靈。異。記。小。間。字。を。万。良。也。訓。也。和名抄。俗。人。或。以。此。字。為。男。陰。以。開。の。俗。字。ある。多。や。新。猿。樂。記。小。開。大。而。然。ま。と。男。會。小。二。名。云。く。長。八。寸。太。四。伏。云。く。と。も。見。也。何。れ。よ。似。多。れ。ど。麻。羅。を。本。語。麻。宇。羅。と。て。此。は。男。女。よ。通。



る稱ある事。既よ注るが如くおまむ。少異あり。第十九段の傳見る

波勢とは。男莖の舊訓。袁婆斯と有を思ふ。男柱は

義と聞ゆまむ。波斯は轉れるあり。柱を波斯良と云

れる語。陽元陰元とある。第五段の傳よ注るが如し。谷川氏を神

代紀よ。陽元陰元とある。依て陽元形の義ありと説へ

まど信ぐ。然依て神代紀あるを。元本小を古事記此

如く成餘之處。不成合之處とやう。小有れむを撰者のさ

強て加。この後世乃訓あるべし。儲は俗よ男根を閉

能古と云は誤あり。其在和名抄。陰核俗云篇乃古刑徳

教云。丈夫淫亂割其勢。勢則陰核也。この陰囊の中あ

る。謂ゆる。睪丸を云ふ詞あるをや。陰囊も同抄。俗云布

久利とあり。凡て和名抄。此等の名を俗云とあまど。皆

古言れるを。漢名を雅と云る。後世此心を以かく云るも

此あり。万葉十六尺。度。娘子が美き貴人のを。たふを

ば坂門らし。角乃布。久礼よあをひ相おれむ。と詠る。角乃

布。久礼を男莖を云ふまど。布。久礼と云語を。會囊。小由

ゆて聞ゆ。桑家漢語抄。陰莖。志毛。登里と有て。奈。ちて

部。秘授抄を引て。下髻の義と云。予。不審き説あり。ちて

本書。此所よ。是所以厭其怒也。といふ語を註さま。多依

た。廣成。宿禰の意あり。如此。此ある事を。御年。神の怒を和さ

む。と云。依厭あり。せ。云。義と通也。まど。此事や。が。御年。神

此御誨れまむ。然る義よは有はじく。決然て。由。此去。去。ま

深き由。ある禁厭術ある。まど。其由。いま。思得。思得。是。訓

抄よ。笠島の道祖神。此陰相を好。○慧子は。都須能美と訓

ばし。本書小。古語以薏曰都須と註さる。新撰字鏡も薏苡  
子玉豆志まゝ苡玉豆志。和名抄小。兼名苡云。薏苡一名芋  
珠。又作薏。和名豆之太萬。とある是る也。須太万と今此を都  
びさて本草家の説も薏苡を俗に四圍麥とも弘法麥と  
も云ふ。麥此如き案ありて。設ハ柔ふて。仁大あり。是謂也  
る薏苡仁あり。まゝ今都須太万といふ物も川設といふ  
物もて。薏苡と同類あると別あり。時珍木艸小苡珠子也  
云ひ。救荒本艸也云物も草珠子と称ふ。設ハいざ固く  
仁いと少き物あり。俗にスゴ玉といひて。緒も通して  
禿あざふびる物なり。此ハ都須太万も非。緒と古も同  
類の草あり。故に薏苡をも川設をも。苡苡て都須太万と  
云ふ也。○山椒は。本書小蜀椒とあり。和名抄小。蜀椒本草  
註云。生蜀郡。故以名之。和名奈留波之加美。一云不佐。蔓椒。  
以多知波之加。也見え。本草和名小。蜀椒陶景註云。出蜀郡。  
美。一云保曾木。

一名大椒。和名布佐波之加美。と此みあり。漢土ふて。もと  
れる故も。蜀椒と云由あり。皇國ふて。薑をり何所も在  
し物あり。然る小物あり。名あり。此物も字をば作らざ  
りし故も。彼國字を用ひて。蜀椒也。神名式小。但馬國氣多  
書。もぞ有る。依次あり。胡桃も同し。神名式小。但馬國氣多  
郡獨椒神社。名神あり。國史も。承和九年十月乙亥。但馬國  
二月廿七日。從五位下。蜀椒。神從五位上と見也。典藥式云。但馬國蜀椒。栢子仁各  
一斗。齋宮式も。櫻椒油。ホソ。あど見也。ちて波士加美とは。  
神武天皇此大御歌ふ見えて。薑此こぞあはれ。彼を根を  
用ふ依り對へて。那流波士加美と云れ也。杓も對りて。瓢  
といふ。布佐波之加美と云る。實此總やうあはれ故も云へ  
類あり。波士加美也云名の意也。神武  
也と聞也。天皇の大御哥此下も注べし。○吳桃也。本草和

名ふ。胡桃博物志張騫使西域還時得和名久留美之故名胡桃出七卷食經と見え。

和名抄もおれじ字鏡小丸まると占斯久考吳桃也。久留彌とあり。

巴巴さて吳桃とめ胡桃ともあるを通音あ然れむ漢土ふ

は舊無巴然るよし木あゆぐ。御国ふは神世とゆ有る也。

をしも書るを此木ふ當る字を作らで有し故あゆこと蜀椒同じ。○鹽は謂ゆ依堅鹽あ

也。○畔は阿阿と訓げき由を既小註せ也。第四十二段の○

班班之。和加知和加知也云ぐ如し。○年穀豐稔矣を多那都母能由

多加爾美能理伎多加爾美能理伎と訓げし。○此今とは廣成宿禰の時を

いふ。本書小此神祇官也云語あれむ如此して御年高

田田白翁白翁が節解ふ謂ふ所遺十一也と云ふはでふて古

語拾遺を作る意義終れ也。然るふ此一段を終ふ載とゆ

上段くふ合合さゆ事あるを是を神世也。大己貴命。小彦名

命の遺法禁厭の術也。總總て禁厭の法を是は此道理あ

ゆ由ゆよ。如此此ゆと云あといハぬし。蝗虫を除去よ。白猪白馬

あどを供供了て祭也。麻柄押草麻柄押草れどの事。何ある理有て如

此此ゆ云あとい測知測知げうらぬ神祕也。今時種くの厭此

も多し。然れども其効あちまちふ奇妙術をのしき事ど

あること多し。凡慮をもて計べのらは。さて此一段蝗虫

此田を損害ふこと。生民の重重災あ也。穀物をもて命を

養ふ人あまむ。此術を以て。蝗虫此災を防去防去あとい大切の

事也。廣成宿禰。此方術方術を受傳へ居て。後世ふ絶て傳ら

ざらむ事を憂ひて。書の尾に記し遺して。末世に傳へむ  
 事を欲せはれず。序文に。愚臣不言恐絶無傳とあるよ。て。  
 宿禰に意趣見るべし。此事此書此外に見えぬと云は。  
 實然る説ありし。○以白猪云々之縁也。此に毎年此二  
 月四日祈年祭ふ奉らゆ事あり。四時祭式ふ。其祭神等。  
 まと供物れど委く載されし中。御歳社加白馬白猪  
 白雞各一と見え。其祝詞ふ。御年皇神等能前爾白久。羊を  
 給ふ神を大年神御年神若年神を更あり。此段に御年神  
 此御子とも有れむ。あむ其御部の神多り。と聞ゆ。故等  
 と云。皇神等能依左志奉年。考云。依志は神魯岐の美麻  
 ちらむ。皇神等能依左志奉年。命よ水穂因を依賜ふよ均  
 しく。是も御年を掌守まは神等の其御年。奥津御年乎。考  
 云。美麻命よ依奉て成幸子給ふをいふ。

五穀の中。稻を最末に熟る故に。奥と云へり。同じ稻よ  
 て。晩成るを奥と云。まよ遅き事をも。万葉小おくてあ  
 ぬと云。手肱爾水沫畫垂向股爾泥畫寄氏取作年奥津  
 御年乎。畫を二ともふ。攪の意に借れり。手の肱をぬあひ  
 へ。向股は第三十二段より出たり。此は民に御年作  
 るとて。田に泥水よ漬をりて。勞おく形状を云へる古文  
 云。八束穂能伊加志穂爾。考云。八束穂を彌握よ長丸稻穂  
 ひ。嚴そりある穂をいふ。故に御紀。皇神等能依左志奉者。  
 依志奉者に皇初穂乎波。其秋の新稻を先神よ千穎八百  
 美麻命よあり。初穂乎波。奉るを初穂と云ふ。千穎八百  
 穎爾奉置氏。考云。穎を稻に穂あり。神よ奉るふ。穂を此  
 已。掛穂と云。是あ。御酒汁米和稻荒稻あど云。皆この  
 千穎八百穎と云。けし。分依物あ。江次第よも。本穎苻謂  
 之。稻切穂謂。應閉高知。應閉を。上よ。閉を。仮字あり。故  
 之。穎とあり。應閉高知。餘の祝詞ふ。應上ともあり。さて。應

酒成醸む缶あり古牙酒をバ醸る醜あがら奉る故  
よ此言あり高知の高た其醜のあけ此高きを云知た敷  
あり宮柱太知とも宮柱醜腹満雙氏上よた醜のさけ高  
太敷とも云よて知べし且醜汁爾母類爾母稱辭竟奉年師  
グ腹よ酒を満足と云り且醜汁爾母類爾母稱辭竟奉年師  
此多き由りて双と云り且醜汁爾母類爾母稱辭竟奉年師  
汁と酒字云ふ即上の醜閉云く是あり類を上の千類  
八百類あまあり然まぞ汁よも類よもと云るは上の二  
種をさして云へるれりて此語諸の祝詞は多く何依  
中よ此あるを語調ひて現く聞えと依を他祝詞ある  
て云状何し九大野原爾生物者甘菜辛菜考云甘菜  
葡野類も古は神お奉まじり青海原爾住物者鰭能廣物鰭  
能狹物は大小の魚あり奥津藻菜邊津藻菜爾至万氏  
爾考云海よてた彼方を於伎といふ於久と云よ同じ陸  
をむ母波を云り然まぞ御服者明妙照妙和妙荒妙爾考  
母と此み云ふを畧あり御服者明妙照妙和妙荒妙爾考

五色此絹布を奉れむ色をもて照る明ると云織の細き  
荒きをもて荒和と云也妙を借字して万葉あざよ考  
と書しを正字ありけりて多倍は此類の物を總ていふ名  
を今京とありて麻の布を細きを和考鹿き多鹿と云り  
言は古よて物を異ふおれりて多倍は此類の物を總ていふ名  
違ふ稱辭竟奉年考云こ此稱辭竟奉年此上并か此奉置  
段あり御年皇神能前爾考云こ此稱辭竟奉年此上并か此奉置  
何師云此御年皇神とあるを神名帳に大和國葛上  
郡葛木御歳神社名神大月次相嘗新嘗と何社を是あり  
然るを考よ高市郡ある御歳神社大歳神社を出して云  
れよ依を達へり高市郡ある御歳神社大歳神社を出して云  
重く祭給ふは白馬白猪白雞。云よ本文よ見種く色  
神おは何らば白馬白猪白雞。云よ本文よ見種く色  
物乎備奉氏右小奉云御服御酒類海山の物どもを皇  
御孫命能宇豆能幣帛乎。云よ既よも云が如し幣帛乎

の下よ備奉と稱辭竟奉久登宣と何也。此よ祝部等稱唯  
云言を略とり。稱辭竟奉久登宣と何也。とある注の意を  
承賜を畏む意あり。さて貞觀儀式ふも。此祭此條よ。京  
職貢白雞一雙近江國豚一頭を見えと也。然まむ神世此  
故事の本を。本文小見えとる如く。白猪あるを。此は得の  
と祀故よ。後ふは豚よ替て獻まはれぬ。然まむ聖武天皇  
此処小詔和買畿内百姓私畜猪四十頭放於  
山野令遂性命とある番猪を豚ありと也。但し其を近  
江國と也。獻し免給牙依由緒を詳れらば。台記ふも仁平  
右少辨資長申云。祈年祭猪近江國未進者云く九日近江  
目代俊弘申云。郡司申云。祭前十餘日狩猪不得之。連日狩  
獵于今無得先例如此之時用代物見北山抄承平四年六  
月月次祭馬代進調布八端任彼例可以調布八端為猪代  
之仰了以同趣仰史と見也。さて此の台記此文は依まむ  
後よたまと野猪を代て獻れるの其をさす小當年ふハ

得ざ也し趣あまむ。其と也遂よ。今世此如く。献らぬ事と  
を成ふらむ。其と神の御心あることと言も更あり。  
けて片巫肱巫ぐ。大地主神ふ教奉りて。此三種此物を獻  
す。御怒を解し給牙と白せ依を思ふよ。御年神を此物  
等を好給ふと通えと也。其は加茂翁説の如く。馬は餘此  
祝詞よ。馳出物止御馬也云て。獻ら依。字思牙。バ。神の乘  
坐と也。雞を時を告る故ふ奉也。猪ハ御贄此料ふぞ有依  
也。加茂翁云。總て白を用ら依。止雨祈よ。白馬を奉る  
也。よ依て思ふよ。日白くして。荒き風雨あうらむ為よ。取  
あらむと云れき。然も有らむ。又按ふ。鳥獸の幽界ふ  
入ると多。多く白く化れる。おやと思。由あり。然れ。白  
きた神よ。近き。故よ。好給ふ。抑神世と也。獸肉を贄と  
よは非じ。猶とく考ふ。抑神世と也。獸肉を贄と  
せる事は。末於神代紀よ。月夜見尊。高天原よめ。保食神の

許ふ到坐る處ふ。保食神乃廻首嚮國則自口出飯又嚮海  
則鱒廣鱒狹亦自口出又嚮山則毛鹿毛柔亦自口出夫品  
物悉備貯之百机而饗之是時月夜見尊忿然作色曰穢哉  
鄙哉寧可以口吐之物敢養我乎迺拔劔擊殺とある。毛鹿  
毛柔ハ鳥獸のおとれゆぐ。今世れ心もて見まむ。其を饗  
奉れるを怒坐る如く聞ゆまむも然よ非び吐出ぬ物  
おゆ故ふ怒坐ゆあす。然まむ大凡の神等も獸をも食け  
むこそ疑あし。然らでを保食神れそを献す給ふべき由  
穴を食し絶給へるを御過失あれど其れと獸を  
も食らむ憊あすし故よかくる御過失も有らす。末了火  
遠理命の山佐智毘古とある。毛鹿物毛柔物を取給予ゆ

ぞ有も食給む料あるばし。毘古として鱒廣物鱒狹物  
を取給へゆぐ食物の料あゆ。故人世をあすても仁徳天  
皇卷ある菟鹿野の鹿れ故事。崇峻天皇卷ふ天皇れ大御  
前ふ猪を獻れゆまると天武天皇の御世よ。牛馬の肉を食  
ふおと残禁給へる事あどを思ふよ。猪鹿を憚あき趣あ  
れむ。天皇とす下くよ至までも。猪鹿を食らむこと言ふ  
も更れす。此外よ。天皇の御獵し給へる事を今數子も盡  
食物の料ありらむ。犬養あど云姓あゆも。御獵の犬を養  
子氏人と聞えたり。ゆと万葉十六よ。八重疊平羣山ふ  
四月と五月れ間よ。菟獵仕る時ふ云く。佐男鹿れ來立歎  
うく。頼よ吾ハ死べし。王よ吾を仕子む云く。吾穴者御奈  
麻須波夜志吾伎毛母御奈麻須波夜之云く。然まば神ふ  
あど有を以ても。天皇命れ食らむこと著し。然まば神ふ

も悉く獻る例ありしと思ふ。祝詞式を見まむ。毛鹿物ケノモノ毛柔物モウモノを獻は由を白せ依む。廣瀬大忌祭。龍田風神祭。道饗祭。遷却崇神祭。おの四祭、此詞と外ふ。奉ま依おとぬきは、別ある由ありと聞え。此四祭み此み毛鹿物毛柔物を備ふるを異ある由ありと所思依おと考す依説あれどくよを洩し於況て天照大御神へは、延曆内宮儀式。延喜、太神宮式。建久年中行事を始免。其餘の書ふぬ。毛鹿物を獻れる例あり。神を悉く獻る例ありむよは此大御神よ必殊ふ獻る式あるは殊ふ今此宮所ミヤトお御鎮座の時ふ。倭比賣命。御杖代とちて戴奉イタキ。川瀬を渡せ給むとびるよ。鹿穴流相しうば。キタナレ穢惡と詔ひて渡、坐さび。忌詞を定給す依七言此

中ふ。穴稱菌アナネぞ云こと有ふ依ても。大御神此甚く惡ひ給ふこぞ知られと。此等のこと委くを伊勢兩宮御鎮座部類考よ注ふを見べしちて此大御神を。古語拾遺ふ。天照大神者。惟祖惟宗尊無二。自餘諸神者。乃子乃臣孰能敢抗と記さき。玉葉ふ。我朝之習以伊勢事爲本と宣する如あまむ。此大御神の惡ひ給ふ故よ。其大御心を本やちて。稍くふ餘諸神カミも。獻らぬ事ふ定給すと所思也。其を貞觀儀式よ。大嘗祭儀よ。食穴限日と見え。日を一本よ月と作るを誤あり此を穴を食る一日を限りて神事奉仕さる由あり延喜神祇式臨時祭の處ふ。凡觸穢惡事應忌者云く。喫穴三日。此官尋常忌之但當祭時餘司皆忌也見也。此官とを神祇官を云ふ。文



保記ふ。猪鹿食、人禁忌百日。同火、人廿一日。又相火七日。不  
參大神宮とあり此を何きも神事預る人。司人等  
此事よて。平人此事ハ非祿ど。此等の文を見通して。漸  
漸小重く忌來れるあとを知はし。天和三年。兩宮とり  
奏上れ。依假服令よも。鹿火。馬牛豕羊猪犬羸。食、鹿肉、人百  
日禁忌。合火、本人者廿一日禁忌。廿一日穢人相火七日禁  
忌。七日穢人相火當日禁忌。當日穢人相火沐浴とあり。此  
顯人定の事よ有まど。案を函み大御神の御定、  
る故。餘諸神も從ひ未して現み其定免れ出來れる  
ぞ有る。依く古意を得とらむ人ハ。自み此旨を思ひ辨  
ふべし。古今著聞集。大學寮の廟供よ。昔を猪穴鹿穴  
進免し。りども。此朝來りし後。大神宮おはし坐ば穢

食供ふべのらびと有るよ依て。後よを供せぬあり  
る。已と有るを思ふ。尼父を孔丘とあり。彼を我  
人ある故。糞といふ其祭。此豚。猪鹿れを供る  
を。大御神の惡ひ給ふことを畏みて。辞する由れ。戎人  
此神とあるは。皇朝よ來て。大御神此御定を畏免  
む。況て皇國よ本より御坐せる神ハ。其大御定よ從まし  
らむ。こと言まも更あり。斯て孔子の此託。依れ。已と  
通えて。後よを糞も。雉水鳥おどを代用ふるよとく  
は成よ。儲かく大御神の惡ひ給ふ故。神廷よ。依御定  
け。此出來。天皇よも。遂よ食給を。御齒固。此供  
御よも。猪穴鹿穴ありしを。後よは鳥よ代らま。已。然れ  
む下よ。は此定を法令給を。燃よも有れ。神奴あらむ人を  
更あり。凡人あらむから。神の御國。神此御民と生ま  
ぬらむ者。此いと上れる世を。ままか。くはま。今現よ。大

御神の甚く惡し給ふ物をし。食ふと云ふその有むや。

眞此道不志有らむ人。とく此旨を明む。ばし。事此序の。

い多く獸肉を嫌ひまして。其を犯せる人。此。燔。馬。馬。御。神。の。を。蒙。る。事。多。一。二。云。は。古。老。口。案。傳。大。神。宮。神。異。記。あ。ど。よ。寿。永。二。年。よ。外。宮。の。一。祢。宜。度。會。彦。章。神。主。五。月。の。こ。ろ。鯉。魚。の。鱠。を。食。る。が。傍。人。よ。戯。れ。て。祢。宜。あ。ま。ど。も。鹿。肉。を。食。ふ。あり。と。云。け。ば。其。夜。よ。靈。夢。あり。て。一。祢。宜。せ。し。て。禁。忌。此。言。を。辨。へ。さ。る。こと。甚。く。道。よ。背。々。也。命。を。取。べ。し。と。宣。ふ。と。見。於。夢。覺。て。の。ち。其。由。を。人。不。語。け。る。が。其。尤。四。日。よ。死。乃。り。と。見。え。ま。と。神。異。記。よ。或。大。名。の。代。參。と。し。て。何。某。と。い。ふ。侍。參。宮。し。け。ば。鹿。肉。を。食。し。時。あ。ま。ど。も。主。不。其。由。を。云。む。も。憚。り。と。て。秘。あ。て。參。詣。せ。し。ま。宮。川。よ。て。身。潔。の。と。き。浴。衣。よ。血。付。と。せ。ら。ま。む。別。不。浴。衣。を。用。し。る。よ。其。よ。も。血。付。ら。ば。異。び。あ。が。ら。參。宮。し。て。返。事。ま。を。し。け。ば。然。る。其。夜。寢。所。の。火。炉。を。り。火。出。て。其。侍。一。人。皆。死。て。其。家。を。焼。ざ。り。け。り。此。を。二。十。餘。年。お。や。ら。む。人。皆。知。と。る。事。あり。穴。火。を。古。く。七。十。五。日。忌。々。ま。ど。も。百。日。の。定。あり。大。神。宮。へ。參。詣。禁。制。あり。能。く。慎。む。べ。し。と。有。り。此。

類のこ。諸書よいと。數多見え。とる。を。熟。く。心。得。て。犯。さ。じ。と。心。懸。べ。し。今。も。田。舎。あ。ど。小。を。獸。肉。食。ふ。こ。を。甚。く。恥。ら。ふ。所。も。あ。る。を。近。頃。を。江。戸。あ。ど。よ。も。冬。小。あ。り。と。此。を。賣。る。店。の。年。々。殖。て。や。高。き。人。め。此。を。食。ふ。事。と。あり。徒。を。弘。む。甚。も。悲。き。か。ざ。り。其。を。多。く。外。國。學。び。見。ら。む。○。鍊。胤。云。大。御。神。の。獸。肉。此。類。を。忌。惡。ひ。給。ふ。由。を。今。い。の。ふ。と。も。測。り。奉。也。難。き。事。よ。あ。ま。ど。推。て。按。ふ。ま。拔。牛。馬。を。宇。氣。母。智。神。此。御。項。の。化。為。と。る。も。此。ふ。て。其。外。の。獸。類。も。同。神。の。御。身。を。生。化。と。り。と。聞。ゆ。れ。ば。食。ふ。ば。き。物。此。如。く。よ。も。思。は。れ。ど。牛。馬。を。農。業。よ。主。と。す。物。あ。る。あ。と。と。馬。あ。ど。は。神。も。人。も。乘。ば。き。物。あ。る。初。め。食。ふ。ま。じ。丸。物。れ。る。事。を。云。め。更。れ。ば。其。餘。此。獸。類。も。初。め。を。食。ふ。ま。じ。其。色。を。聞。て。は。其。肉。を。食。ふ。も。事。欠。ぬ。事。あ。る。も。然。る。あ。と。も。鳥。獸。は。自。餘。の。活。物。と。異。あ。る。が。上。よ。豊。受。大。神。を。し。も。大。御。神。の。殊。更。お。重。く。崇。き。祭。り。給。ふ。こ。を。あ。ま。ま。御。由。緒。を。も。所。思。は。し。と。大。御。神。を。姫。大。神。と。し。も。御。坐。ま。せ。む。の。と。以。て。忌。給。ふ。や。と。所。思。ふ。あ。り。神。世。を。大。御。神。子。を。獸。類。を。供。御。ふ。奉。也。し。と。

無をもて。如此を推量り奉まる。又神も身獸の類。凡て活物を奉れるハ。皆活あぐら。用ひ給へる趣。ふて。其を殺して。食給ふこと。を絶て。あき事と聞也。然まむ終よ。を。身類をも忌給ふ。遠く。せさへ。思ハ。あり。抑。豊受。大神の御靈。よ。依て。瑞穂。因の奥津。御年を飽まで。給て。ほる。上。甘菜。辛菜。鱒。此。廣物。鱒。此。狭物。奥津。藻菜。辺津。藻菜。よ。至る。まで。好。之。く。お。取。用。ひ。む。よ。何。の。足。を。右。も。事。々。有。ら。む。又。毛。の。柔。物。を。用。ひ。む。も。然。る。ば。し。左。も。右。も。獸。肉。此。忌。愆。き。を。云。も。更。あ。ま。ど。其。忌。給。ふ。御。由。縁。を。結。及。ぶ。限。ゆ。を。考。考。知。ら。ま。布。し。き。事。よ。て。是。や。ぐ。て。其。御。惠。ふ。報。ひ。奉。る。百。千。ダ。一。ッ。とも。云。ば。く。や。

爾八千矛神將婚高志因出意

支都久辰為命出子俾都久辰

為命出子沼河比賣平ノミコトノミコヌナガハヒメヲ亦云沼名マタニヲスヌ宜波比賣ゲハヒメ

命ミコト幸行出時到其沼河比賣出イデマシントキニイタリソノヌナガハヒメノ

家而歌曰夜知富許能迦微能イヘニテウタヒタマハクヤチホコノカミ

美許登波夜斯麻久爾都麻麻ミコトハヤシマクニツマ

岐迦泥氏登富登富斯故志能ギカネテトホトホシコシ

久邇邇。佐加志賣遠。阿理登伎。  
クニニカカシメヲアリトキ  
 加志氏。久波志賣遠。阿理登伎。  
カシテクハシメヲアリトキ  
 許志氏。佐用婆比爾。阿理多多。  
コシテサヨバヒニアリタタ  
 斯用婆比邇阿理加用波勢多。  
シヨバヒニアリカヨハセタ  
 知賀遠母。伊麻陀登加受氏。淤。  
チガヲモイマダトカズテカ

須比遠母。伊麻陀登加泥婆遠。  
スヒヲモイマダトカネバヲ  
 登賣能那須夜伊多斗遠。淤曾。  
トメノナスヤイトヲオソ  
 夫良比。和何多多勢禮婆比許。  
ブラヒワガタタセレバヒコ  
 豆良比。和何多多勢禮婆阿遠。  
ヅラヒワガタタセレバアラ  
 夜麻邇奴延波那伎。佐怒都登。  
ヤマニヌエハナキサヌツト

理。伎藝斯波登與牟。爾波都登  
理。迦那波那久。宇禮多久母。那  
久那雷登理加。許能登理母。宇  
知夜米許世泥。伊斯多布夜。阿  
麻波勢豆加比。許登能加多理

其登母。許遠婆。爾其沼河日賣。  
未開戶而。自内歌曰。夜知富許  
能。迦微能美許等。怒延久佐能。  
賣邇志阿禮婆。和何許許呂。宇  
良須能登理敘。伊麻許曾波。知

杼<sup>ド</sup>理<sup>リ</sup>邇<sup>ニ</sup>阿<sup>ア</sup>良<sup>ラ</sup>米<sup>メ</sup>能<sup>ノ</sup>知<sup>チ</sup>波<sup>ハ</sup>那<sup>ナ</sup>杼<sup>ド</sup>理<sup>リ</sup>  
 邇<sup>ニ</sup>阿<sup>ア</sup>良<sup>ラ</sup>牟<sup>ム</sup>遠<sup>ヲ</sup>伊<sup>イ</sup>能<sup>ノ</sup>知<sup>チ</sup>波<sup>ハ</sup>那<sup>ナ</sup>志<sup>シ</sup>勢<sup>セ</sup>  
 多<sup>タ</sup>麻<sup>マ</sup>比<sup>ヒ</sup>曾<sup>ソ</sup>阿<sup>ア</sup>遠<sup>ヲ</sup>夜<sup>ヤ</sup>麻<sup>マ</sup>邇<sup>ニ</sup>比<sup>ヒ</sup>賀<sup>ガ</sup>迦<sup>カ</sup>  
 久<sup>ク</sup>良<sup>ラ</sup>婆<sup>バ</sup>奴<sup>ヌ</sup>婆<sup>バ</sup>多<sup>タ</sup>麻<sup>マ</sup>能<sup>ノ</sup>用<sup>ヨ</sup>波<sup>ハ</sup>伊<sup>イ</sup>傳<sup>デ</sup>  
 那<sup>ナ</sup>牟<sup>ム</sup>阿<sup>ア</sup>佐<sup>サ</sup>比<sup>ヒ</sup>能<sup>ノ</sup>惠<sup>ヱ</sup>美<sup>ミ</sup>佐<sup>サ</sup>迦<sup>カ</sup>延<sup>エ</sup>伎<sup>キ</sup>

氏<sup>テ</sup>多<sup>タ</sup>久<sup>ク</sup>豆<sup>ヅ</sup>怒<sup>ヌ</sup>能<sup>ノ</sup>斯<sup>シ</sup>路<sup>ロ</sup>伎<sup>キ</sup>多<sup>タ</sup>陀<sup>ダ</sup>牟<sup>ム</sup>  
 伎<sup>キ</sup>阿<sup>ア</sup>和<sup>ワ</sup>由<sup>ユ</sup>伎<sup>キ</sup>能<sup>ノ</sup>和<sup>ワ</sup>加<sup>カ</sup>夜<sup>ヤ</sup>流<sup>ル</sup>牟<sup>ム</sup>泥<sup>ネ</sup>  
 遠<sup>ヲ</sup>曾<sup>ソ</sup>陀<sup>ダ</sup>多<sup>タ</sup>伎<sup>キ</sup>多<sup>タ</sup>多<sup>タ</sup>伎<sup>キ</sup>麻<sup>マ</sup>那<sup>ナ</sup>賀<sup>ガ</sup>理<sup>リ</sup>  
 麻<sup>マ</sup>多<sup>タ</sup>麻<sup>マ</sup>傳<sup>デ</sup>多<sup>タ</sup>麻<sup>マ</sup>傳<sup>デ</sup>佐<sup>サ</sup>斯<sup>シ</sup>麻<sup>マ</sup>伎<sup>キ</sup>毛<sup>モ</sup>  
 毛<sup>モ</sup>那<sup>ナ</sup>賀<sup>ガ</sup>爾<sup>ニ</sup>伊<sup>イ</sup>波<sup>ハ</sup>那<sup>ナ</sup>佐<sup>サ</sup>牟<sup>ム</sup>遠<sup>ヲ</sup>阿<sup>ア</sup>夜<sup>ヤ</sup>

爾ニ那ナ古コ斐ヒ伎キ許コ志シ夜ヤ知チ富ホ許コ能ノ

迦カ微ミ能ノ美ミ許コ登ト能ノ迦カ多タ理リ

碁ゴ登ト母モ許コ遠ヲ婆バ故カ其レ夜ソ者ノ不ヨ合ハ

而テ明クル日ヒ夜ノ爲ヨ御シ合タ矣ヒ。

八千矛神此神の事を記せる。神代紀す。何の段ふも大己貴命とあり。古事記に。前後何れ段ふも首よを大國主

神とあるを。此段れみ八千矛神と記せるは。師説の如く。

歌ハ首シ有リ依リ御ノ名ナあまむあるは。○高志コ國クニを師説れ

如く越コ國クニあり。出雲國神門郡あり。後小越前加賀能登越中。

越後コれズ分クまカたスども歌あどよはれ不レなレはレ越コと

支都キ久ツ辰ク爲レ命ミコト俾ハ都ツ久ク辰ク爲レ命ミコト意イ支シ都ツ俾ハ都ツ久ク辰ク爲レ命ミコト奥オキと邊ヘりて。

親子を分とせと聞ゆれど。久辰爲の義ハ詳あらば。一本良為とあり。此よ依らむ位イの義イよク然シまシどレれハ詳シあらバ。○沼河比賣ニ波ハ比ヒ賣メ命ミコト師シ云ク神カミ名ナ式シキ小コ越コ後コ國クニ頸ケ城シロ郡ノ小コ奴ヌ奈ナ川カハ神カミ社ヤシロ。小コ奴ヌ奈ナ川カハ神カミ社ヤシロ。小コ奴ヌ奈ナ川カハ神カミ社ヤシロ。小コ奴ヌ奈ナ川カハ神カミ社ヤシロ。

郷あり。此地名なり。然れば此も奴奈加波と訓べし。那を

るを之の意あり。其を右の和名抄に綏靖天皇の御名に

て知れし。凡て能家那と云ふ例多し。沼河も書紀に

沼河も書紀に。淳名川を作ると思ひ定めてよ。沼河

此のたと。彼ちて此御名は上比賣之八上比賣と同例

あり。○將婚を用婆比爾と訓べし。此言即御歌ふ出と

あり。○幸行は師云伊傳麻志くぞ訓べし。下の志を行賜ふを

云ふ古言なり。天智天皇紀童謠に伊提麻志と見え。万葉

八よ伊而麻左自常屋あどあり。はと神代紀に遊幸崇神

天皇紀に幸行まと所よ依て來字臨字あど字も然訓ぬ。

行のみあらば來をも云ふ。今の俗語に行をぬ來字も御

出あさると云と同じ。○万葉小行幸と書る字みあ美由

伎と訓ゆ。古言を知らぬ非訓あり。何れも伊傳麻志と

訓てあそ宜し。四卷に君之御幸乎とある。此みぞ。然

る云まし。信は然らざまむ通えぬ。哥あり。あは天皇ふ

限らば。尊みて。誰上ふも云はこせなり。然るを何れも

天皇の出坐は書あまの字を他よめ借るあり。凡て

古の文字に拘むらざりしこと。是ふても知べし。まは常

よは行幸と書を古事記にハ。凡て幸行とのみ書り。是古

此例ある。や。右に引る。崇神天皇紀にまは万葉三卷あど

ふも然。○歌曰は。宇多比賜波久と訓べし。○夜知富許能

は。八千矛之あり。前ふ出と。○迦微能美許登ハ。師云神

命ふて。尊稱なり。万葉三。天原從生來神之命。五。多良



は。八嶋岡よて。八嶋岡の中ふてと云意あす。○都麻岐  
迦泥氏都麻岐妻麻岐を覓あす。神代紀よ。覓因此云矩貳  
麻儀神武天皇御歌ふ。延衰斯麻加牟とあるも。將覓あす。  
宇治拾遺物語。人の妻まぐ者ありせ云。中昔までも  
いする言と見也。万葉七よ。過往し人よ往卷目やもあど  
も見。迦泥也。万葉よ多く不得と書す。さて継躰天皇紀ふ  
也。日皇女云くの御哥。此と甚。○登富登富斯也。遠く志あり。  
く似たり。考へ合さばし。○登富登富斯也。遠く志あり。  
此言古書よも中昔の書よも他有をさく。出雲よす。  
見え返りて。返りて今世有を常いふ言あす。  
遠きを云。源氏物語總角卷より。とてと布どく。あくの  
きを云。みもてあさせぬ万葉云く。此はうとく。あくの  
るあり。○佐加志賣也。賢妃女あす。但智深くかしあき取  
と云也。常よをさうしらどちて。悪き方よ多く云免れど  
此をさふゆらぬ。あど愚ある反よて。布めと依言あり。

崇神天皇紀ふ。叡智仁德天皇紀ふ。賢此云左河之土佐日  
記よ。あや人く此も有らまど。けの志死も無るはし。あれ  
のとき。○阿理登伎加志氏は有と聞而を延ある例の古  
言れす。○久波志賣也。麗女也云む。如し。宇流波志也。宇  
波とるありと加。万葉十三よ。鮎矣令咋麗妹爾ともあす。  
け詠す。はと古書どもよ。細字をも久波志也訓す。水垣宮  
段よ。目微比賣也云人。名もあす。○伎許志氏も上は伎加  
志氏と同じ。契冲云。伎加志氏と。伎許志氏と同。詞あまど  
ふさよ。ばいと云ひ。と云ひ。と聞食きかし免れ。通をし云。如し。  
ま。人の我よ言と云。こやをも。伎許須と。繼體天皇紀の  
云へり。其を次は沼河比賣の哥ふ見也。

御歌よむ。野施磨俱備都磨く。祢哥泥底播屢比能哥須我  
能俱備く。俱婆施謎鳴阿唎等。積く底。與慮志謎鳴阿唎等  
積く底とあり。○佐用婆比爾。佐を眞ふ通ふ辭あり。用婆  
比を。万葉ふ結婚と書。靈異記よむ。伉儷與波不ともあ  
り。言此意ハ。呼よび出さるるあらむ。今世の語ふ婦をとぶ  
と云も是あり。竹取物語よ。やみの夜よもあ。かしこよ  
よばひとと云。り。垣間見まどひ。何す。り。さる時よりあむ  
万葉十三よ。夜延。為。書。正字。非。扱。大和  
物語。故。式部。卿。宮。を。桂。のみ。と。せ。ち。ふ。と。ば。ひ。賜。ひ。な。ま  
ど。お。わ。し。坐。ざ。り。な。り。と。有。る。女。の。方。よ。り。と。む。ふ。と。云  
り。○阿理多。斯。在。立。あり。お。は。即。次。ふ。和。何。多。く。勢。禮  
婆とある事あり。加用波勢。と。り。前。よ。り。ま。む。己。命。の。家。と  
り。発。出。と。る。ふ。を。云。う。と。も。思。え。る。ま。と。

けよむ。万葉一。埴安乃堤上爾在立之。十三よ。嶋之埼邪  
伎安利立有花橘乎れどあり。○阿理加用波勢。在通は  
せり。はと二の阿理を。万葉ふ有通。と云ふ詞。巻くふ多加  
依中。○蟻往來。六の巻。見え。ま。と。三。巻。と。め。有。る。此。義。あ  
らむ。後。蟻。此。義。と。云。ふ。を。前。よ。り。非。説。あらむ。思。ひ。し。を  
免。ら。ま。て。舞。々。る。時。此。嚙。み。あ。り。の。姿。け。び。憎。き。ど。あ  
り。丸。の。跡。を。恋。し。き。よ。あ。う。で。離。れ。し。面。影。を。い。つ。此。世  
ふ。り。を。忘。る。べ。き。云。く。と。あ。る。を。思。ふ。み。判。官。の。心。多。う。に  
し。事。を。思。ひ。寄。て。う。と。へ。依。り。て。案。ふ。も。蟻。ち。ふ。虫。を。能。く  
歩。行。く。と。り。名。よ。負。依。物。と。思。え。る。ま。は。と。有。待。七。卷。ま。と  
む。蟻。通。と。書。と。る。ま。正。字。あ。る。べ。し。は。と。有。待。十。卷。あ。ど  
え。見。有。雙。爲。の。三。有。く。て。れ。ど。云。は。有。ふ。て。然。而。在。然。而。不  
被。在。云。く。而。在。あ。ど。く。常。ふ。云。言。あ。ま。ど。も。在。云。く。せ。上。ふ

置オカおせむ。後世の語コトふ少コトき故ユふ。耳ミミ遠トホく聞キゆ免ナシ也。然シカまど  
も。蟻アリの義コトふまむ難カタふし。お此ココ二ニの中ナカ孰シカおらむ考カべし。諸モト  
此ココ句コトを上ウの許コト曾ソと云イハ辭コトも無ナシくまよ仰オホる言コトも非ナシぬよ  
下シタを勢セと。第ダイ四シ音ネもて絶ツまるハ古コ此ココ長ナガ哥カの中ナカふある一ヒト  
格カクあり勢セ下シタの婆ハハ字ジの脱ツと依ヨり加カ茂モ翁ウ此ココ云イハまお依ヨる  
何ナニらび万マン葉エフ二ニの天テン傳デン入ニル日ヒト刺シ奴ヌ礼レ云イハく。まよ聖セイ尅ク伊イ乃ノ知チ多タ延エン奴ヌ礼レ云イハく。五イ  
久ク大ダイ雪セツ乃ノ乱ラン而ニ來キ礼レ云イハく。三サンの久ク堅ケン乃ノ天テン所ショ知チ奴ヌ礼レ云イハく。五イ  
ふ周シュ具キ斯シ野ノ利リ都ト礼レ云イハく。まよ聖セイ尅ク伊イ乃ノ知チ多タ延エン奴ヌ礼レ云イハく。五イ  
こ絶ツて事コトの轉テンる際サカイあること云イハく。伊イ乃ノ知チ多タ延エン奴ヌ礼レ云イハく。五イ  
去ク佐サ礼レ麻マ加カ利リ伊イ麻マ勢セイ云イハく。おの勢セイも同ドウじ格カクあり。○多タ知チ  
賀ガ遠エン母モハ。大ダイ刀タウ之ノ緒コも免ナシ也。能ノといえで賀ガと云イハる。古コか  
非ヒ毛モ我ガ呼フともと緒コは身ミ小コ著シ佩ヘ料リョウ免ナシ也。其ソノ状カタチ也。大神宮式  
免ナシ也。紐ヒモ之ノ緒コあり。緒コは身ミ小コ著シ佩ヘ料リョウ免ナシ也。其ソノ状カタチ也。大神宮式  
神寶カミタカラ小コ玉タマ纏マキ横ヨコ刀タウ一ヒト柄カバ。柄カバ長ナガ七シ寸ス。鞘カバ柄カバ頭カバ横ヨコ著シ銅ドウ塗ヌ金カネ長ナガ二ニ  
長ナガ三サン尺シヤク六ロク寸ス。柄カバ頭カバ横ヨコ著シ銅ドウ塗ヌ金カネ長ナガ二ニ

寸八分。頭頂著ケ什シ銀ギン一ヒト勾コ。著ケ五色イロ組クミ長ナガ一ヒト丈シヤク。阿志須惠アチスエ組クミ四シ  
尺シヤク。柄カバ著ケ勾コ金カネ長ナガ二ニ尺シヤク。著ケ鈴スズ八ハチ口クチ。琥コ金カネ鮒フナ形カタチ一ヒト雙フタ著ケ緒コ紫ムラサキ組クミ長ナガ  
六ロク尺シヤク。まよ須ス我ガ流リウ横ヨコ刀タウ云イハく。雜サカ作サカ横ヨコ刀タウ二十ニジュウ柄カバ云イハく。阿志須  
惠エ著ケ緋ヒ紺コン帛ヒト緒コ長ナガ九ク尺シヤク。廣ヒロ二ニ寸ス。せのるふて知チべし。拾遺集  
神樂歌カミガク小コ石イシ上ウふ依ヨや壯夫シラトコの太刀タウもが免ナシ也。組クミ緒コ垂シタて宮路ミヤヂ  
通カむ。まよ物モノ名ナ小コをがハハ橋ハシを免ナシ也。歌ウタ筑紫ツクシと也。此ココ  
まよ來キまど扱サツをも免ナシ也。太刀タウの緒コ革カ此ココ端ヘ此ココみぞのる。貞  
十六年。檢非違使ケンビワイシの請コト小コ依ヨて。横ヨコ刀タウ此ココ緒コ五位イノ已ニ上ウ。同ドウ用ヨウ唐タウ  
組クミ六ロク位イ已ニ上ウ。並ナラ用ヨウ綺キ新羅シンラ組クミ等トウと定サめられしこと。三代サンダイ實錄ジツロク  
用ヨウ胡コ桃トウ染シメと云イハく。続後紀ツグキ見ミ也。○伊麻イマ陀ダ登トウ加カ受セ氏シ  
也。未ミ解カ而ニ免ナシ也。万葉十二マンヤウジュニ小コ他ヒ因イン爾ニ結ムス婚コン爾ニ行ユク而ニ太刀タウ之ノ緒コ

毛未解者左夜曾明家流。こを此歌の意を約て詠る歌お  
 め。○淤須比遠母之。倭建命此段。美夜受比賣歌。和賀  
 祁勢流意須比能須蘇爾云。應神天皇卷女鳥王歌。波  
 夜夫佐和氣能美淤須比賀泥。万葉三大伴坂上郎女祭神  
 歌。十六自物膝折伏。手弱女之押日取懸云。外宮儀式  
 帳。大物忌无位神主岡成女云。著明衣木綿手次前垂  
 懸氏天押日蒙氏洗手不干之氏。二所大神乃朝大御饌夕  
 大御饌乎。日別齋敬仕奉おぞ見え。大神宮式御裝束此中  
 小。帛意須比八條。長二丈五尺。廣二幅。と見也。度會宮のふ。帛絹忍  
 比四條。各長二丈五尺。廣二幅。と云。儀式帳。絹を純條を具と作。ま  
 とあり。正中御飾記。ハ

綾忍比と云ひ。是らを以思ふ。此名は意曾比と通ひて。  
 弘一幅也。あり。師をおし帯を約免とるありとて。  
 襲覆を約免とるれ。比を濁りて訓れ。さまぎ其右  
 よ引く書どももの趣よかおむ。びまお右の式よ。長二丈五  
 尺。廣二幅。有るも。帯此類とハ聞え。同御裝束。御帶  
 之。長七尺。廣一寸八分。とある。大く異あま。あり。ま  
 美夜受比賣。哥。須。積。せ。よ。み。儀。式。帳。よ。蒙。り。と。云。る。あ。ど。  
 帯の類。非。け。て。其。状。を。一。幅。よ。は。ま。二。幅。よ。は。ま。幅。此。隨。  
 る。こと。炳。し。幅。よ。は。ま。二。幅。よ。は。ま。幅。此。隨。  
 小。い。せ。長。物。ある。を。後。世。の。婦。人。に。被。衣。あ。ど。の。如。く。頭  
 よ。被。り。て。衣。上。字。掩。ひ。下。は。襦。まで。垂。る。を。見。也。其。著  
 万を試よ云は。中央此処を頭よ當て蒙り。左右。下。さ  
 て。帯。の。端。を。垂。へ。て。遣。達。へ。て。腰。ふ。ま。と。ひ。前。へ。回。して。結  
 び。て。端。を。襦。へ。垂。あ。る。は。し。其。委。き。こ。を。知。が。と。け  
 ま。ど。右。よ。引。る。古。書。ど。も。の。趣。を。合。考。行。て。大。概。ハ。知。ら。る。  
 け。て。其。上。代。よ。男。女。共。小。人。よ。誰。と。知。ま。じ。と。面。貌。を。隠

以料の服と見えし也。今此も妻問の時あまむ御貌を人  
小隠給ふやて著給子依あるべく。はと彼女鳥王は隼別  
王はあまむ織あふも己命れが隠びて通ひ給をむ  
料と見也。はて女を常ふも人よ見也ることを取て兒を  
隠す物よしあまむいおとても著るるはし然  
るを奈良の頃あど小れりてハ男の著るあまむ既く絶  
て女は古此礼服は如くあゆて神を祭る時あどよのみ  
著あるあ依べし右の如くれまは是字有職家ふてかく  
し緇と名くと或物よ見えとるを古の意よとくかあ子  
依名あ○伊麻陀登加泥婆とは結び固ある處を未解然  
巴加し。○伊麻陀登加泥婆とは結び固ある處を未解然  
間ふとあ也。かの腰より前へ回して結べ依處あ依べし  
ととひ然せばとも必結びて固むる所を  
巴然泥婆を奴爾と云意あ也。此例古歌よを多し。一二擧  
む。天智天皇紀の童謠よ。たみのこれや牙のひもせく。ひ

と牙どふ。伊麻拖藤柯禰波みあはひもとく此もいまど  
解ぬよ此意あり。万葉四よ奉見而未時太爾不更者如年  
月所念君ハハ秋立而幾日毛不有者此宿流朝開之風者  
手本寒母この餘よも多加也。今云あ不此詞の例を數奉  
られとまど今を省きて注  
し。はて此處ふて語を絶て。次句ふを連け。下は阿遠夜  
麻爾云く此處よ係て心得べし。○遠登賣能を處女之ふ  
て。沼河比賣を云るれ也。○那須夜伊多斗遠を鳴板戸  
をあ也。那須を令鳴ふて。即戸を閉ことを然言也と聞也。  
其は古の戸は多く開き戸ふて。開閉を依よ音ある故あ  
依べし。源氏物語空蟬卷よ此御かうしをけしてむせて  
あらひあり。或抄ふあらはに。かうしをわろに音

れ也とあり。此も隙こと。万葉五よ。遠等咩良何。佐那周伊  
を多らひせ云り。と聞也。多斗乎。意斯比良伎。せあゆむ。此の歌詞を取ると免ゆと  
見ゆゆよ。佐那須と改とるハ。佐を例に眞ふ通ふ辭あり。  
ちて此を。今隙を云ふは非交。閑。○淤曾夫良比。推れぬ。  
ある戸と云意あり。夜を辞あり。○夫良比。万葉十四よ。多禮曾許能。屋能戸於曾夫流。とあ  
ゆ夫流。と同きを延て云ふ。ぬゆ。○和何多。勢禮婆ハ。吾  
立有者あり。多氏礼を延て。多く勢礼と。○比許豆良比。云  
引あり。万葉十三よ。曾朋舟爾網取繫引豆良比。云く。曰豆  
良賓云くとあり。文選西京賦よ。拏攫を。けて押し引をかく  
夫良比。豆良比を添て云。ゆむ。あぐ。閑る戸を押し引と。か

ふかくして強ふ開むと志給ふあり。師をぶらひ。おらひ  
云れまう。今世言も引を引豆流と云。豆良比。即豆里  
を延とゆあり。源氏物語若菜上よ。猫のことを。綱いと長  
やどよ。夕霧よ。惜みぐ。およも。ひ。○阿遠夜麻邇。於青山  
あり。青く見ゆ。ゆ物ある故ふ。あぐ。山をかく云あり。○奴  
延波那伎ハ。師云鶴者鳴あり。和名抄よ。唐韻云。鶴。怪鳥也。  
漢語抄云。沿江とあり。宇鏡よハ。鶴まよ。冠辭考ふ。万葉十  
ふ。奴延鳥之裏。歎座津。五よ。奴延鳥。乃能杼與比居爾云く。  
十七よ。奴要鳥能。宇良奈氣之都。追云く。あむ。あは彼が聲  
此悲。えく。恨免しげあるを。人此哭泣ふ。譬ておら。此二

句は物思ひを<sup>カ</sup>ししも。此<sup>ケ</sup>が鳴聲を聞ていよく憂<sup>ウレヒ</sup>る方ふ  
 意<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。はて裏歎とかき能<sup>カ</sup>掃与比とも云るをもて或人  
 家傳法師と云在<sup>シ</sup>。ハ凶<sup>キ</sup>き<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>とも三井寺住學せし<sup>カ</sup>。此寺  
 遥<sup>カ</sup>ある谷<sup>カ</sup>の鳴<sup>カ</sup>も耳と<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>ば<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>。高<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>苦<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>声<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>と  
 語<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>土<sup>カ</sup>佐<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>大神<sup>カ</sup>垣<sup>カ</sup>守<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>依<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>奴<sup>カ</sup>衣<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>今<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>猿  
 樂<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>笛<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>ひ<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>ぎ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>音<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>如<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>。亥<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>。此<sup>カ</sup>始  
 め<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>夜<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>。鳩<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>い<sup>カ</sup>け<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>大<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>。鶯<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>羽<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>如<sup>カ</sup>し。  
 依<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>思<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。鳥<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ど<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>類<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>夜<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>。且<sup>カ</sup>喉<sup>カ</sup>呼<sup>カ</sup>ともあ  
 る<sup>カ</sup>。隱<sup>カ</sup>声<sup>カ</sup>ある<sup>カ</sup>。非<sup>カ</sup>で<sup>カ</sup>から<sup>カ</sup>声<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>あり  
 け<sup>カ</sup>。○佐<sup>カ</sup>怒<sup>カ</sup>都<sup>カ</sup>登<sup>カ</sup>理<sup>カ</sup>伎<sup>カ</sup>藝<sup>カ</sup>斯<sup>カ</sup>波<sup>カ</sup>登<sup>カ</sup>與<sup>カ</sup>牟<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>野<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>雉<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>響<sup>カ</sup>ル<sup>カ</sup>。冠<sup>カ</sup>  
 辭<sup>カ</sup>考<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。雉<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>野<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>故<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。野<sup>カ</sup>於<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>詞<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>冠<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>何  
 止<sup>カ</sup>。佐<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>眞<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。万<sup>カ</sup>葉<sup>カ</sup>十六<sup>カ</sup>。狹<sup>カ</sup>野<sup>カ</sup>津<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>のみ<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>雉  
 ふ<sup>カ</sup>。登<sup>カ</sup>與<sup>カ</sup>牟<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>聲<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>聞<sup>カ</sup>ゆ<sup>カ</sup>依<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>。万<sup>カ</sup>葉<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>ど<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>獸

此<sup>カ</sup>聲<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>。何<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>音<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>多<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>免<sup>カ</sup>止<sup>カ</sup>。動<sup>カ</sup>字<sup>カ</sup>響<sup>カ</sup>字<sup>カ</sup>ハ<sup>カ</sup>ど<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>書<sup>カ</sup>止<sup>カ</sup>。  
 皇<sup>カ</sup>極<sup>カ</sup>天<sup>カ</sup>皇<sup>カ</sup>紀<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>謠<sup>カ</sup>哥<sup>カ</sup>。阿<sup>カ</sup>波<sup>カ</sup>努<sup>カ</sup>能<sup>カ</sup>。け<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>雉<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>和<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>抄<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>。木<sup>カ</sup>  
 積<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>始<sup>カ</sup>騰<sup>カ</sup>余<sup>カ</sup>謀<sup>カ</sup>作<sup>カ</sup>儒<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>あり<sup>カ</sup>。木<sup>カ</sup>須<sup>カ</sup>。二<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>木<sup>カ</sup>之<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>何<sup>カ</sup>ま<sup>カ</sup>ぎ<sup>カ</sup>。古<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>伎<sup>カ</sup>藝<sup>カ</sup>斯<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>。万<sup>カ</sup>葉  
 十四<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>吉<sup>カ</sup>藝<sup>カ</sup>志<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>止<sup>カ</sup>。他<sup>カ</sup>卷<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>雉<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>皆<sup>カ</sup>如<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>訓<sup>カ</sup>べ  
 を<sup>カ</sup>知<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>。○爾<sup>カ</sup>波<sup>カ</sup>都<sup>カ</sup>登<sup>カ</sup>理<sup>カ</sup>迦<sup>カ</sup>那<sup>カ</sup>波<sup>カ</sup>那<sup>カ</sup>久<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>庭<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>雞<sup>カ</sup>者<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>止<sup>カ</sup>。  
 此<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>本<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>迦<sup>カ</sup>那<sup>カ</sup>ある<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>。人<sup>カ</sup>家<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>庭<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>住<sup>カ</sup>故<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>。庭<sup>カ</sup>於<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>と  
 枕<sup>カ</sup>詞<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>。と<sup>カ</sup>野<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>同<sup>カ</sup>じ<sup>カ</sup>。然<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>後<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>。庭<sup>カ</sup>鳥<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>のみ  
 呼<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>迦<sup>カ</sup>那<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>は<sup>カ</sup>失<sup>カ</sup>ぬ<sup>カ</sup>。雞<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>垂<sup>カ</sup>尾<sup>カ</sup>乃<sup>カ</sup>云<sup>カ</sup>。け<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>二<sup>カ</sup>ハ  
 鳥<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>鳴<sup>カ</sup>こ<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>み<sup>カ</sup>賜<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。夜<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>明<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>歎<sup>カ</sup>き<sup>カ</sup>給<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。此<sup>カ</sup>ハ  
 葉<sup>カ</sup>三<sup>カ</sup>。何<sup>カ</sup>時<sup>カ</sup>も<sup>カ</sup>。此<sup>カ</sup>夜<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>明<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>待<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>ふ<sup>カ</sup>。寢<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>宿<sup>カ</sup>が<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>迄

ば。瀧上の淺野此雉開こそ。立動らし。此も雉此鳴を夜の  
明るあせふ云。奴延の鳴ををみ給ふ。夜の明るとし  
あり。然まむ彼を加茂翁説の如く物思此もよふしとれ  
る由れゆ。はれバこそ雉と雞をよむ。登与牟。那久せ云。  
ふ。彼鶴のみを。那久といを。那伎と云。言。十三。小。隱。口  
此用格を。変。と。る。も。意。此。異。あ。ま。バ。あ。流。べ。し。言。十三。小。隱。口  
の泊瀬此固ふ。左結婚よ。吾來れば。棚雲。雪を零來ぬ。左  
雲。雨を落來ぬ。野鳥雉を動む。家鳥可鶏も鳴く。左夜は  
明け。此夜を旭ぬ。入。て。且眠む。此戸開りせ。此を此歌ふ依  
て詠。と聞ゆ。右の答。哥も。今此沼河此賣の御答よせむ  
を。下。ふ。ち。て。上。此。淤須比遠母。伊麻陀。登加泥婆と云處を。  
引。佐奴都登理云。へ。お。け。て。心。得。る。し。語。此。勢。を。阿。遠。夜。麻。爾。と。云。へ。係。れ。

已さきと意を。野。其故を。板戸を押ふ。引。か。ふ。の  
於鳥云。く。係。れ。り。太。刀。緒。淤。須。比。お。せ。を  
く。志。て。時。遷。り。て。得。入。ら。ぬ。布。ど。ふ。太。刀。緒。淤。須。比。お。せ。を  
も。未。解。ぬ。間。ふ。早。夜。の。明。お。る。を。せ。云。意。あ。ま。む。れ。り。上。よ  
引。遠。万。葉。十。二。卷。此。歌。太。刀。緒。未。解。は。此。意。を。得。て  
取。れ。る。物。ぞ。○。宇。禮。多。久。母。ハ。神。武。天。皇。紀。よ。慨。哉。此。云。于  
黎。多。棄。伽。夜。と。見。え。万。葉。八。ふ。宇。禮。多。伎。也。志。許。霍。公。鳥。曉  
之。裏。悲。爾。云。く。十。ふ。慨。哉。四。去。霍。公。鳥。云。く。神。樂。歌。よ。支。利  
支。利。須。乃。禰。多。佐。宇。禮。太。左。也。云。く。如。ど。何。也。中。昔。の。物。語  
多。く。あ。る。○。那。久。那。留。登。理。加。あ。を。上。此。三。鳥。を。總。て。い。ふ。  
詞。あ。り。加。は。後。世。ふ。加。那。と。云。意。あ。り。○。許。能。登。理。母。母。を。助。辭。れ。



已。此鳥等余と云むが如し。○宇知夜米許世泥。宇知を打  
お正。は非也。案よ打をいへぬ。夜米を令病を約とるよて。  
打て惱し苦し絶せと云お正。凡て麻世字約めて米と云  
進も令進あり。淨も令淨あり。屈も令屈あり。鳴こを止  
り。深も令深あり。おまらに以て心得と。鳴こを止  
免むと云りは非也。皇極天皇紀。哥よ。騰拳預能柯微乎。は  
ぬ伊勢物語。夜も明ば狐よ令食あてくと鶏のまぬ地  
ふ鳴てせあを遣おる。と云歌を。凡て此様も意も。全此と  
似ぬ已。今云。此哥のきおはは免あてを。狐よ非は出羽の  
用ふ器の木よてさしとる。又を大木を空よくゆと依あ  
どを。伎都と云。まよ宵鳴。玄は雞は水手胸を冷ゆと云こ  
雞と言已。夜明とらむお。彼伎都ふうち食て胸を冷さ

むと云るお已。此哥袖中抄よハ。我家のとあるふても。狐  
よ非は依こと灼し。狐を家よ近く何依物おらねむあり。  
此を既に屋代氏藤井高尚おどよ告とまむ。参考本まよ  
新釈よも記さまよと已。さて予が此説を。委く伊勢物語梓  
弓よ記し。許世泥ハ乞望ふ意此辭おて。古歌よ多し。まお  
置とゆき。万葉四よ。夢爾見乞はと五よ。宇米我波奈。知良須阿利許  
曾れど。形多多くある許曾と同くて。はと二。不通事無  
有巨勢濃香毛。四よ。百夜乃長有與宿鴨おども詠み。まよ  
十一よ。戀爲道相與勿湯目。はと有超名湯目。おども詠て  
許曾。許世。許須。こお一辭の轉れるおめ。斯て泥もはと乞  
望辭おて。應神天皇。卷女鳥王御歌。よ。佐邪伎登良佐泥。万  
葉一よ。名告沙根。まよ草乎。荇核おどれ多し。まぬ万葉

九ふ。妻依來世尼十四。都麻余之許世禰あど有。此と  
全同じ。○伊斯多布夜。此詞の意ハ。下ふ注せ。催馬樂を  
し説を信。よく覚ゆまむ。師云。此と下五句を。此次の  
注さば。記傳よ就て見べし。歌ふも同く。何。は。と。其終三句を。其次。これ歌ふも二所。  
朝倉宮段の歌等も見えて。書紀万葉の哥。みお其歌。此  
意よたか。はらび。あ。一首。此結ふ。添て云。語れ。○  
阿麻波勢豆加比。天馳使と聞ゆ。遠飛鳥宮段。輕太子の  
御歌。天飛鳥も使ぞ。鶴。音の聞えむ時。我名問。さ。祿。  
と有。を思ふ。ぼ。其。よ。付て思ふ。よ。上句は。伊曾伎飛。やと  
云。や。いそぎを約。絶て伊斯と云。ま。と。輕太子の御哥  
よ。阿麻陀牟とあるも。天飛あまむ。多布とも云。於

し。然れ。む。此。二句は。遙。隔れる。道の。間をも。言。通ハ。使  
を。虚空飛鳥。へて云。ゆ。り。や。○許登能ハ。事。之。ふ。て。三  
言。一。句。あ。り。次。の。言。よ。連。り。て。一。句。と。を。は。べ。ら。ば。凡。て  
五。言。れ。る。べ。き。を。四。言。三。言。七。言。よ。定。ま。ま。き。る。物。あ。ゆ。を。其  
ふ。云。依。れ。ど。上。代。の。哥。よ。を。い。ひ。七。言。あ。ゆ。べ。き。六。言  
を。六。言。よ。云。ひ。七。言。を。八。言。九。言。あ。ゆ。べ。き。五。言  
は。無。こ。と。あり。但。し。後。世。い。ち。も。依。文。字。餘。と。云。例。を。上  
代。の。哥。ふ。を。非。る。を。古。学。び。る。人。も。今。風。を。む。む。人。も。共。ふ  
其。格。を。あ。ら。せ。其。定。ま。れ。る。格。を。己。考。へ。出。せ。る。あ。と。有。り。  
別。よ。記。せ。り。○今。云。此。師。説。は。字。音。○加多理其登母。六言  
仮。字。用。格。ふ。記。され。と。ゆ。見。る。べ。し。○凡て古哥ふを。母てふ助  
語言。よ。て。母。は。余。と。云。む。が。如。し。辞。多。し。そ。が。中。よ。後。世。の  
格。と。ち。異。あ。る。○許遠婆。を。三。言。是。を。ば。ふ。て。即。此。妻。問。れ  
事。を。云。あ。り。か。れ。む。此。結。の。五。句。ハ。彼。言。通。ふ。使。の。如。く。

此歌の傳を已往て。今此事ハ遙き後世までも。故事の語  
言ふぞ爲あむ。と云ふと此意あるべし。○未開戸而は師  
云。伊麻陀斗袁比良加受氏を訓べし。阿氣受氏と古言を  
驗るよ。必戸は比良久也云。○怒延久佐能也。加茂翁説  
ふ。此をえ草の女と連々て。れをくくとある草れ如  
死手弱女れ也。也云意あ也。且奴也那の通ふ也。草のえ  
臥を偃也云ふ類あ也。まよノエフスと云夏草れあひ  
可見 とあ也。師も此説を用ひて。はと或人を草れ芽と云  
意ふおぐく也云。此を惡うら也。此説よ依と死を怒延  
くて。只草と云も同く見べし。草を何もあひ摩く物れ  
る故よ。怒延草と云、只あぼての草れことを云べし。藤を

藤靡と云グ如し。はと師説よとらむ。只  
草也云ふを非で。怒延ふ用あるあり。○賣邇志阿禮婆  
師云賣は女志ハ助辭よて。女邇のまむあ也。さて其迹阿  
とあまバ女あればと云ことぞ凡て那理那留那礼。○和  
也云辞は。尔阿理尔阿留尔阿礼を約めとるものぞ。○和  
何許く呂を吾心あ也。○宇良須能登理叙ハ。師云浦渚之  
鳥ぞれ也。万葉六よ。内渚爾波千鳥妻呼。とを免る類を云。  
内を今本よ納と。はと七よ。圓方之湊之渚鳥浪立巴妻唱  
立而邊近著毛。十一よ。大海之荒磯之渚鳥。十七よ。美奈刀  
能須登利。あか多 此等れ渚鳥ハ。一の鳥名れ如くも聞ゆ  
れ也。みさごの事ありと云。今此れ歌詞と照して見まバ。  
あづ洲小在る鳥あぬぼし。万葉十四よ。波麻渚 けて是ま  
杵里ともを免り。

て四句の意を。我丈夫あはせむ。如此も有はじたま。女は  
あとおまきバ。浦渚ふ立騒ぐ鳥は如く。心の左右ふ騒ぎて。  
平和からぬと云れ也。右は引る哥どもは如。其心は不ぞ  
は。上よ引る万葉十三此歌の。女答歌ふ。隠口乃長谷小園  
ふ夜延せは。吾夫のきみと。奥床よ母を睡とめ。外床よ父  
を寝とめ。起立ば。母知ぬべみ。出行ば。父知ぬべみ。野干玉  
此夜を旭去ぬ。幾許も。不念が。おと隠嬢も。今云。此哥の  
引て訓れとると少異あるを。畧解よ依まるあり。そを畧  
解ある訓を。師の後此考あまきバあり。但し吾夫のまみ本  
よを大皇才與とありて。師を訓を欠れと依。あまきふ準牙  
を。千蔭が夫才美。与此誤と云ふ。ふ依ま也。あまきふ準牙  
て推度るべし。或説よ。浦洲を心安と云よとせ。○伊麻許  
とめと云む。大く非こせあり。

曾波知栢理。邇阿良米は。今社者千鳥邇將有れ也。師云。千  
鳥は。邇く藝命此大御歌ふも。波麻都千栢理ととみ賜ひ。  
日代宮段よも見えて。古歌よ常多くと免は鳥あり。然る  
鏡よも。和名抄よも此鳥。けて此は。上の浦渚乃鳥ぞ。我承  
の見えぬをいふうし。は。上の浦渚乃鳥ぞ。我承  
あるれまは。今あそハ浦渚鳥あらぬと云。意あはを。歌の  
調さ牙云。難き故り。言残加牙て千鳥をば云也。此鳥即浦  
騒ぐ鳥あること。右よ引る万。○能知波ハ。後者ふて。三言  
葉六の哥此如くあまきバあり。○能知波ハ。後者ふて。三言  
一句れ也。○那栢理ハ。平和れり。今世此言よ。物の平和あ  
は。こをを。那栢夜加とも。那栢理とも云。是れ也。其那栢ハ  
能栢とも通ひて。能栢加と云も同じあとぞ。万葉十三よ。  
吹風も和者

吹<sup>不</sup>ちて歌を調<sup>レ</sup>を旨<sup>キ</sup>と<sup>レ</sup>返<sup>ル</sup>る物あ<sup>ハ</sup>故<sup>ニ</sup>よ。上の知<sup>チ</sup>栲<sup>リ</sup>理<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>對<sup>ス</sup>  
多<sup>ク</sup>。那<sup>ノ</sup>栲<sup>リ</sup>理<sup>ト</sup>詞<sup>ヲ</sup>墨<sup>ニ</sup>と<sup>レ</sup>流<sup>ル</sup>物<sup>ナ</sup>ル<sup>レ</sup>。契<sup>チ</sup>沖<sup>ク</sup>が<sup>レ</sup>汝<sup>ノ</sup>鳥<sup>ノ</sup>あ<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>免<sup>レ</sup>よ  
むと云<sup>フ</sup>意<sup>ハ</sup>あり<sup>キ</sup>。か<sup>ク</sup>ま<sup>カ</sup>む。此<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>句<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>今<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>そ<sup>レ</sup>逢<sup>フ</sup>か<sup>ト</sup>  
云<sup>フ</sup>る<sup>ハ</sup>非<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>。か<sup>ク</sup>ま<sup>カ</sup>む。此<sup>ノ</sup>四<sup>ノ</sup>句<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>今<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>そ<sup>レ</sup>逢<sup>フ</sup>か<sup>ト</sup>  
く<sup>テ</sup>。如<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>浦<sup>ノ</sup>渚<sup>ニ</sup>千<sup>ノ</sup>鳥<sup>ノ</sup>の如<sup>ク</sup>。心<sup>ノ</sup>の騷<sup>ク</sup>ぐ<sup>レ</sup>や<sup>モ</sup>。後<sup>ニ</sup>ふ<sup>レ</sup>必<sup>ズ</sup>逢<sup>フ</sup>  
見<sup>ル</sup>。心<sup>ノ</sup>の平<sup>ナ</sup>和<sup>ナ</sup>び<sup>キ</sup>を<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup>ル<sup>レ</sup>。下<sup>ノ</sup>文<sup>ニ</sup>よ<sup>リ</sup>。其<sup>ノ</sup>夜<sup>者</sup>不<sup>レ</sup>合<sup>ト</sup>あ<sup>ラ</sup>  
合<sup>ト</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ハ</sup>。あ<sup>ラ</sup>ま<sup>シ</sup>後<sup>ニ</sup>を<sup>レ</sup>平<sup>ナ</sup>和<sup>ナ</sup>よ<sup>シ</sup>ら<sup>ハ</sup>む<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>よ<sup>シ</sup>何<sup>ト</sup>ま<sup>カ</sup>む<sup>レ</sup>。阿<sup>ノ</sup>遠<sup>ノ</sup>  
夜<sup>ノ</sup>麻<sup>ノ</sup>邇<sup>ノ</sup>云<sup>ク</sup>。と云<sup>フ</sup>る<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>は<sup>レ</sup>。即<sup>チ</sup>後<sup>ニ</sup>ハ<sup>レ</sup>平<sup>ナ</sup>和<sup>ナ</sup>あ<sup>ラ</sup>む<sup>レ</sup>状<sup>ヲ</sup>  
を<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>。○伊<sup>ノ</sup>能<sup>ノ</sup>知<sup>チ</sup>波<sup>ハ</sup>那<sup>ナ</sup>志<sup>シ</sup>勢<sup>セ</sup>多<sup>ク</sup>麻<sup>ノ</sup>比<sup>ヒ</sup>曾<sup>ソ</sup>を<sup>レ</sup>命<sup>者</sup>莫<sup>ク</sup>死<sup>ス</sup>賜<sup>ヒ</sup>そ  
あり<sup>キ</sup>。志<sup>ノ</sup>勢<sup>ハ</sup>令<sup>シ</sup>死<sup>ス</sup>を<sup>レ</sup>約<sup>ス</sup>免<sup>レ</sup>と<sup>ル</sup>言<sup>ハ</sup>あり<sup>キ</sup>。水<sup>ノ</sup>垣<sup>ノ</sup>宮<sup>ノ</sup>段<sup>ノ</sup>の歌<sup>ハ</sup>。奴<sup>ノ</sup>  
須<sup>ノ</sup>美<sup>ノ</sup>斯<sup>ノ</sup>勢<sup>ノ</sup>牟<sup>ノ</sup>登<sup>ノ</sup>云<sup>ク</sup>と<sup>レ</sup>あ<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>も<sup>シ</sup>。竊<sup>ニ</sup>將<sup>ハ</sup>令<sup>シ</sup>死<sup>ス</sup>と<sup>レ</sup>ふ<sup>レ</sup>。竊<sup>ニ</sup>殺<sup>ス</sup>さ

む<sup>カ</sup>む<sup>カ</sup>云<sup>フ</sup>あ<sup>ラ</sup>と<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>ル<sup>レ</sup>。垂<sup>仁</sup>天皇<sup>ノ</sup>紀<sup>ニ</sup>あ<sup>ラ</sup>ど<sup>モ</sup>。弒<sup>シ</sup>を<sup>レ</sup>レ<sup>セ</sup>ツ<sup>ル</sup>  
と<sup>レ</sup>訓<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>是<sup>ハ</sup>あり<sup>キ</sup>。弒<sup>シ</sup>ま<sup>シ</sup>と<sup>レ</sup>死<sup>ス</sup>字<sup>ノ</sup>の音<sup>ト</sup>  
混<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>。但<sup>シ</sup>今<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>を<sup>レ</sup>殺<sup>ス</sup>意<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>び<sup>。自<sup>レ</sup>死<sup>ス</sup>る<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup>あ<sup>ラ</sup>ま<sup>カ</sup>む<sup>レ</sup>。</sup>  
古<sup>ノ</sup>言<sup>ハ</sup>ふ<sup>レ</sup>。立<sup>チ</sup>を<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>須<sup>ク</sup>行<sup>ハ</sup>を<sup>レ</sup>由<sup>リ</sup>加<sup>レ</sup>須<sup>ク</sup>あ<sup>ラ</sup>と<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup>例<sup>ニ</sup>よ<sup>リ</sup>。令<sup>シ</sup>死<sup>ス</sup>と<sup>レ</sup>  
は<sup>レ</sup>云<sup>フ</sup>。ち<sup>テ</sup>命<sup>ヲ</sup>死<sup>ス</sup>ぬ<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>は<sup>レ</sup>何<sup>ト</sup>う<sup>ヤ</sup>聞<sup>カ</sup>れ<sup>ル</sup>ぬ<sup>ア</sup>く<sup>レ</sup>ち<sup>レ</sup>  
え<sup>。万<sup>葉</sup>集<sup>ノ</sup>も<sup>シ</sup>あ<sup>ラ</sup>。儲<sup>カ</sup>く<sup>レ</sup>歌<sup>ヲ</sup>る<sup>ハ</sup>意<sup>ニ</sup>二<sup>ツ</sup>お<sup>聞</sup>也<sup>。一<sup>ツ</sup>は<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup></sup>  
か<sup>シ</sup>あ<sup>ラ</sup>例<sup>ナ</sup>あ<sup>ラ</sup>。儲<sup>カ</sup>く<sup>レ</sup>歌<sup>ヲ</sup>る<sup>ハ</sup>意<sup>ニ</sup>二<sup>ツ</sup>お<sup>聞</sup>也<sup>。一<sup>ツ</sup>は<sup>レ</sup>後<sup>ニ</sup></sup>  
ふ<sup>レ</sup>必<sup>ズ</sup>逢<sup>フ</sup>見<sup>レ</sup>ば<sup>レ</sup>き<sup>キ</sup>や<sup>ト</sup>よ<sup>シ</sup>。其<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>ま<sup>テ</sup>死<sup>ス</sup>あ<sup>ラ</sup>び<sup>長<sup>ラ</sup>子<sup>ヲ</sup>テ<sup>。待<sup>テ</sup></sup></sup>  
了<sup>リ</sup>子<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>あ<sup>ラ</sup>。二<sup>ツ</sup>お<sup>聞</sup>は<sup>レ</sup>。今<sup>ニ</sup>夜<sup>ノ</sup>逢<sup>フ</sup>見<sup>ル</sup>ぬ<sup>コ</sup>を<sup>レ</sup>深<sup>ク</sup>慨<sup>シ</sup>みて<sup>。戀<sup>ニ</sup></sup>  
死<sup>ニ</sup>給<sup>フ</sup>形<sup>ヲ</sup>云<sup>フ</sup>ル<sup>レ</sup>。初<sup>ノ</sup>の意<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>時<sup>ニ</sup>後<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>こと<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>程<sup>ニ</sup>  
夜<sup>ノ</sup>のこ<sup>ト</sup>を<sup>レ</sup>能<sup>ク</sup>知<sup>ル</sup>波<sup>ト</sup>云<sup>フ</sup>ル<sup>レ</sup>。明<sup>日</sup>夜<sup>ノ</sup>為<sup>シ</sup>御<sup>合<sup>ト</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ハ</sup></sup>  
以<sup>テ</sup>見<sup>ル</sup>ま<sup>カ</sup>む<sup>レ</sup>後<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>あ<sup>ラ</sup>る<sup>ハ</sup>。凡<sup>テ</sup>古<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>記<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>哥<sup>ヲ</sup>も<sup>シ</sup>お<sup>延</sup>佳<sup>ニ</sup></sup>  
が<sup>レ</sup>附<sup>ル</sup>る<sup>ハ</sup>。傍<sup>ノ</sup>注<sup>ヲ</sup>れ<sup>ド</sup>古<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>ラ</sup>ぬ<sup>モ</sup>也<sup>。○阿<sup>ノ</sup>遠<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup></sup>  
あ<sup>ラ</sup>ま<sup>カ</sup>む<sup>レ</sup>論<sup>ハ</sup>ふ<sup>レ</sup>も<sup>シ</sup>足<sup>ラ</sup>ぬ<sup>コ</sup>を<sup>レ</sup>あ<sup>ラ</sup>ぬ<sup>モ</sup>也<sup>。○阿<sup>ノ</sup>遠<sup>ノ</sup>夜<sup>ノ</sup></sup>

麻邇比賀迦久良婆を於青山日之隱者ふて。日此暮るを云ふ也。迦久禮婆と云はききを。迦久良婆と云は古言此一  
格なり。近飛鳥宮段大御歌。美夜麻賀久理氏と云はも  
同じ。此格を加久良年加久理。陰陽式備祭文。留里加久  
良婆とあるも。古言に依まるなり。○奴婆多麻能ハ夜と  
云むやての枕言ふ也。冠辭考云。万葉五よ。奴波多麻能用  
流能伊昧仁云く。十二よ。野干王之夜渡月之云く。十よ。鳥  
玉之夜霧隱云く。ル布多。まよ四よ。黒王之玄髮山乎云く。  
此を黒と扱げけぬ。かく連とる哥。ル布十四よ。夜干玉  
能夢所見乍。十七よ。奴婆多麻能都奇爾年加比氏云く。奴

婆多麻能伊毛我保須倍久云くあど何也。連くると也。轉  
也。月よ冠し。矢黒とも夢とも連け。まよ伊の一音よも  
かけて。妹とも連けたり。何ら玉の年と云たり。轉りく  
て。璞の月日荒田麻之全夜毛抑。奴婆玉を云辭ハ私記ふ。  
不落あど扱げけとる類あり。抑。奴婆玉を云辭ハ私記ふ。  
鳥扇之實也。其色黒以喻之と云るを宜と云。其を和名抄  
よ。射干一名鳥扇。和名加良。少あ也。然れむ射干玉と書  
正字ふて。夜干玉野干玉あど書ゆ。音を借とるなり。射  
干此家ハ黒き玉の如くふて。野よ生る物もあよ。我因ふ  
は野眞玉と云あるはしと有也。猶委くを冠辭考。まよ師  
云冠辭考ふ。此を野眞玉あゆ有はいの。或説よ。縫葉  
と奴を黒を云て。黒羽玉。あは或人説よ。鳥扇の葉ハ羽ふ  
ありれと云えとル悪し。

似ある故。此草を野羽と名け。其家を野羽王と云。凡  
巴と云。牙はぞ宜き。信よ鳥扇といひまよ俗よ檜扇と○  
用波伊傳那牟ハ。夜者將出。凡巴。おを聞と巴。起出。戸を  
開きて入奉らむと云。意ふて。出凡むと云。お。出。外  
ふて會むと云。お。何ら。○阿佐比能ハ。朝日之よ。次  
句を云む。ぞ。此枕詞。お。○惠美佐迦延伎氏ハ。咲榮來  
而凡巴。源氏物語末摘花卷。お。老人ども。お。みさ。う。え。て。見  
奉。る。明石卷。お。見奉。る。と。り。老。あ。忘。ま。齡。延。る。心。ち  
あ。て。咲。榮。て。云。く。総角卷。お。女。ば。ら。日。來。打。お。ぶ。や。き。お。ゆ。  
お。ご。り。凡。く。咲。榮。え。お。く。御座引。お。く。ろ。ひ。お。ど。け。お。ど。見  
え。と。巴。竹。取。物。語。お。を。笑。ひ。榮。え。て。と。も。有。り。  
人。の。喜。び。咲。む。顔。の。榮。む。る。お。ま。バ。云。牙。巴。ち。て。祝。詞。お。  
も。お。朝。日。之。豐。榮。登。と。も。云。ひ。て。其。ち。ま。人。凡。咲。榮。と。は。顔

を相似ある故。朝日之を置く凡巴。○多久豆怒能ハ。栲  
綱之。ふ。白と云む。と。て。此發語。お。ゆ。こと。既よ。注へ巴。第七  
十六段栲綱の下見べし。○斯路伎多陀牟伎。白腕。お。巴。和名抄。お。腕。  
和名太く無岐。一云宇天と。凡巴。天武天皇紀よ。難波天皇。  
大御歌。お。斯漏多陀牟岐。と。も。詠ませ。賜へ巴。○阿和由伎  
能ハ。沫雪之。よ。て。沫雪のこ。せ。を。上。よ。出。次。句。を。云。む。ぞ。て。此發語。お  
巴。○和加夜流牟泥遠ハ。弱や。う。ある。胸。を。と。云。む。が。如。し。  
凡て和加志と云。言。此。本。は。物。の。未。成。固。ま。ら。ぬ。意。お。巴。は  
て。固。加。ら。ぬ。と。巴。轉。り。て。や。ハ。ら。の。形。を。も。云。此。を。其。意  
凡巴。人の齡。まよ。草木。お。ど。よ。云。も。未。成。固。ま。ら。ぬ。意。凡。り。  
さて。其中。よ。美。る。方。お。云。を。賤。む。る。方。よ。云。と。の。差。あ。

正固はらぬ方よ云々賤むるありやをらう けり沫雪よ  
ある方よ云々美るあり今此を美て云也 けり沫雪よ  
ゆ連く意は脆くて固のらぬ方歌の意を柔うあるを美  
ゆ方れ也。けり上の腕ハ男神此腕此は女神此胸れゆ。男  
神此腕を以て。女神此胸をと云意ぞ。下此須世理毘賣の  
御哥よを胸字と先  
よ云てさて白き腕そどくきせ有て其意あ ○曾陀多  
るあとま知ほし。此処を九せびを混ひぬべし。○曾陀多  
伎は俗小曾と叩くと云こせれ也。凡て事を緩く和や  
曾登とも曾呂理登をも云をみあ此曾あり此句を契冲  
を曾は添よる辞よてあ叩れりれををそれり  
云が如しといひ師を背抱れり云云或ハ漢籍遊仙窟  
陀多伎を手抱ありと云説もあり皆よろし。漢籍遊仙窟  
小拍搦婢房間と云ゆもどく似あゆあどぞ。○多々伎麻  
那賀理とを胸を叩おき交り抱を云ふ。麻那賀理を。麻奴

加流あり少師の云まし。然も有ほし。奴と那を常よ通  
ひまを賀を濁るを  
音便 麻奴加流とは。麻奴久を延ある言。麻奴久を拱と同  
れり。古麻奴久を組貫あ也。けり今也。其古麻奴伎の古を省  
死。伎を延て麻那賀理と云ふて互ふ手を差交し抱く  
由あり。かの拱を己が左や右の手を組貫あり此を女手  
と男手とを組貫あま事ハいけり異あまど  
も言の意 彼繼體天皇紀ある御歌よ。多く企阿藏播梨を  
た全同じ。彼繼體天皇紀ある御歌よ。多く企阿藏播梨を  
何ゆ句。即ち此言ふ當れゆ。左ふ引くそ此阿藏播梨も糾  
を見べし  
あまむ此と同意あ也。○麻多麻傳は眞玉手あ也。○多麻  
傳佐斯麻伎ハ玉手差纏あり。玉手とを美死手を不死て  
云。手玉とて手よも玉を飾まむ。然る佐斯ハ彼方子差や  
手やもにべりまど猶さよハ非じ。



依あす。麻伎を枕ふびるあと取す。妹之手將纏あづく多  
く詠み。ま手枕纏とも。枕ふ纏とも。枕纏とも。麻久良加  
牟とめ云す。万葉五よはとまでの玉手さしう牙さねし  
の玉手はし更牙とひ。八ふ天飛や領中のと忘死眞玉手  
も寐て忘ぐもと詠り。○毛く那賀爾ハ契冲説ふ。股長よ  
あすぞ云す。其を足を伸て。もはらのふ寐るはるれす。○  
伊波那佐牟遠ハ。寐者將宿よて。遠ハ毛能遠と云意の辭  
れり。次ある須世理毘賣の御歌ふ。伊遠斯那世々もあす。  
万葉二よ。奥波來依荒磯乎色妙乃。枕等卷而奈世流君香  
聞。奈世流を寐。而あり。五ふ。夜周伊那奈佐農。安寐不令寐あ。十四  
ふ。伊利伎氏奈佐禰。入來而寐。十七よ。吾乎麻都等。奈須良

牟妹乎。奈須良牟ハ。十九よ。安寝不令宿君乎。奈夜麻勢ま  
ぬ安寝勿令寝あまらるを合て心得るし。寐てふ言は。那奴  
泥と活くれす。然るまその奴泥を常ふ云也あまをく通  
那佐牟あぞ云す。ハ。はと伊と云も。寐こぞれる戎寐乎安  
心得おくきが如し。宿宿毛不寝あぞ重ねて云も常あす。上よ処く引る。継躰  
我入坐し。あとす。巴おまぎゆして。魔俱囉。因利おるど巴  
して。いもが手を我よはるあ。己が手をいもよはるし  
あ。まさ死ねらと。きあざはりあ。くしろうまいねあ  
と。おと有る十三句。此の哥は。阿佐比能云くよめ。此まで  
此さはやとく似とめ。但し彼を男の御哥よて。自然為給  
ふ由あり。此を女此哥ふて。男此然為とるを由あり。  
○阿夜爾。三言け句あす。此言を應神天皇卷。建内宿禰歌。  
雄畧天皇卷。三重姝歌。天皇大御歌あぞよもあす。万葉小



と云てはこと ○明日夜久流比能用を訓べし其由者

足るべあむ 今云第八十三段 此即用波伊傳那牟とある夜

上ふ云傳ふ注せり ぬレ也 ○爲御合矣美阿比志賜伎と訓べし 万葉十よ八

世々ゆ乏嬬人知ルル也 苦思サ牙ダせ々セるも此等レ此 故事を思フるルあハるルべし 但苦字今本は告と誤マす

○門人曾我常昌高岡彝たよび越原正蒿ら云ふ此巻を

上木して世小弘たよびと勤シむ者ナ美濃因惠那郡坂下村

小住免たよび吉村重時ま同郡田瀬村小家をたよび丹羽正徳

はと加茂郡神戸たよび里人神戸正邦と三人たよびるガ彼初巻

よレ也次クをシ勞ウまシ人ク此力も添ヒてガく刊本トは

成ルるル也

19  
14  
111

